變動物學

秋美生著

明治
39 9 20
內交

變動物學目次

◎はしがき……一
◎赤い蝶……二
◎海の怪物……三
◎鳥のペターハーノ……五
◎び　ば……七
◎にるくろこぢろ……九
◎興　一　魚……一三
◎いろ〳〵の動物……一五

目次

◎蝿の目方……一〇
◎地下の人……一三
◎蛭に似てゐる虫……一五
◎きつゝきの帽子……一七
◎蟻の仲間……一九
◎猿とマッチ……三八
◎動物の婚禮衣……四〇
◎ゐいぼあの巣……四五
◎かめれおん……四九

◎ぱぷあ人の繪……五三
◎海の蛭……五八
◎かばせみ……七三
◎とりとりぐも……七九
◎「なまこ」の中にゐる魚……八二
◎未開人の美術……八五
◎動物の壽命……八八
◎潮……九二
◎蜥蜴……九六

目次

◎サソリの自殺……一〇六
◎白　蟻……一一四
◎親を食ふ人……一一八
◎か　へ　る……一二三
◎波　浴……一三二

變動物學目次終

變動物學

はしがき

秋美生

さら〳〵流れてゐる山の渓流にも、よく見ると奇麗の藻や石の角に、小ひさい蝦の遊んでゐるとがある、石を起して見ると、その下には、よく、白い星のやうな可愛らしい蟹が居るものである。

春暖かい日に海の邊へ行くと、青や赤や黄の、眼もさめる程色の鮮かな、小さいものがきら〳〵光つて、水の中に泳いでゐる、海苔のついた石傳ひに、手か何かで掬つて罐に入れて見ると、まるで色々の星が中天にか、つて、罐の中に宇宙ができた

ように見える、その光つた小さいものは海月の子である。

I love not Man the less, but Nature more.

自分も「バイロン」と一所に此詩を誦つて、海月や蝦とあそびたい。

毛虫や蛇は多くの人は嫌ひである、併し、醜さも何も昂然と曝露して、少しも自分を偽らずに遊んでくれるもの丶方が、いくら慕はしいかしれないのである。

變動物學であるから、無論、普通の動物學のように、組織的に論述するのではない又どういふ方面に筆が及んで行くかは、今豫め約束しておく事ができぬ。

赤い蝶

「ジェツフエリース」は病身であつたので、自分の家の近くより外に遠く遊ぶことはできなかつたのであるが、餘程微妙な處迄、自然の美を感得してゐる、即ち、其の言葉に、

一匹の奇麗な赤い蝶が、廣い翅を扇のように伸して、涸れた池の圍りにある柳の傍を、ひら〳〵浮いて飛んでゐる、赤と白の筋は恰度その羽に太陽の光があるやうに光つてゐる、こんな蝶がもつと澤山ゐてくれ丶ばい丶、花も見えず、草も快からず、葉も熱に萎れた夏の日中に、少しの色でも鮮かなのは夫程に嬉しいものである、色は、自分にとつてはパンと共になくてはならぬ。

夏とれる魚は多くは綠で涼しそうな色をしてゐる、「ジェツフエリース」は海を知らなかつたと見える。

海の怪物

海には古から色々の怪物がゐる、海は汪洋として廣い、靑くて底も計られぬ、暴風雨の夜など殊に凄いものであるから、多くの人、殊に未開人などが海に色々の怪物がゐると想像したのも無理のないとである、龍を見たといふ船長もあれば、何

十丈とない長蛇が波の間を縫うて、自分の船の方へ來るのを見たと云ふ人もある、「ポントピダン」の「クラーケン」などは殊に有名であるが之等の神話や傳說に關係する物は後で緩くり話すとして、今は實際海中を游泳してゐる大きな魚の二三を擧げて見よう。

ニューフアウンドランドの大章魚といふのは躰の中央部は比較的大きくないが、脚の端から端迄は六丈もあるといふことである。

「ホエールボーン、ホエール」といふ鯨は長さは七丈にも達する怪物であるが、性は極く臆病である。「カチャロット」といふ奴は大さは前の鯨程であるが、性質は一層猛惡で、章魚を一番多く食ひ、其他普通の魚、時には「アザラシ」などの類をも攻擊する、手負になると往々ボートをも襲ふて來る、こんな時には其仲間が必ず友の危難を救ひに來るのである、ある時米國の船が、大きな雄の「カチャロット」に襲はれて、遂に夫が爲に沈沒せられたといふ實話がある。之よりも猶一層勇猛なのは「大ローカル」である、長さは百二十フイートもあるといふことであるが、之は恐らく誇大に過ぎるであらう。

最大の鯨といふのは(「ラボック」と云ふ)「シッバルドの鯨」であらう、長さは八丈から大きいのは九丈にまで達する。

昔は英國の海岸邊にも鯨は隨分澤山ゐて、「ポントピダン」僧正の話にも、

時には海一面に鯨の吹くシホで、煙突が無數に立つてゐるやうであつた、

とあるが、今はだん〳〵北海の方へと押込められて、餘程稀になつて來た。

鳥のペターハーフ

鳥は鳥合の勢などゝ云つて、まるで秩序も何もない樣に云ふけれど、仲々さうでない、鳥は多く群生して巢を作るが、中に狡猾な奴があつて、自分から巢を作るべき材料を集めずに、近所の已に出來上つてゐる巢から、小枝や木片などを盜んで來る

のがある、若し之が他の鳥に知れる時には忽ち仲間から擯斥され、甚しきは遂に喙き殺されて了うともあるといふことである。

ニユージーランドにゐる「ヒユイア」といふ鳥は餘程面白い鳥である、此鳥は雄と雌とその嘴の構造が全く異つてゐて、二羽合して恰度一羽の「キツヽキ」のやうな動作をする。

雄の嘴は普通の鳥の嘴のやうではあるが、非常に堅くて、よく樹を喙くのに適してゐる、若しこつ〳〵と叩いて見て中が空洞のやうな音がすれば、いきなり穴を開けて中の虫を食べるのである、然し雄の嘴は只強い許りで、「キツヽキ」の持つてゐるやうな、尖端のとがつた、鉤の附いてゐる舌がないので、穴は開けても、中の蟲を引出すことができぬ、處が「ヒユイア」では雌の嘴が雄のよりは一層長く、且つ尖端が少し曲つて何か引張出すに好都合のやうに出來てゐる、雄が穴を開けると今度は雌が代つて、長い嘴を穴の中に差し入れて虫を引出し、其虫は仲よく二人で分けて食べるのである。

この「ヒユイア」では生活の必要上、全く雌雄共棲でなくてはならぬ、雌と雄とは常に相携へて同所に居らねばならぬのみならず、二羽の間が密接に融合して居らねばならぬ、若し互に性情の融和しない者があつて、一方が折角穴を掘つても一方がそれを引出さぬと云ふやうなことがあれば忽ち双方の生命に影響する、故に之等の鳥に於ては無意識的（全く此の語が正當であるとは斷言することができぬが）に完全な共同的の單位を形つてゐるものである。

ぴ　ぱ　ぴ　ば

蛙には色々のものがある、「トノサマガヘル」は夏田舍へ行くと、苗代田などの中で澤山に啼いてゐる、日本では「アカガヘル」を藥だと云つて食ふ所があるが、外國では反對に「トノサマガヘル」の方を食ふ、殊に佛蘭西では「トノサマガヘル」の股の肉

などを料理に用ひて珍重するといふとである。蛙に「ピパ」と云つて、容姿は一番醜い（日本には墓といふ隨分醜い奴が居るが、外國には墓は割合に少くない）が、背中へ穴を掘つて、その中で子供を育てる不思議なものがある、「シピーユ、ド、メリアン」といふ人の「スリナムの昆虫」といふ本に、

「ピパ」は其子供を脊中の皮から拵へる、沼などの水中に棲んでゐて、奴隷の黑人等はその肉を食ふ

とかいてある、又「フィルマン」と云ふ人の話に

「ピパ」の雌は雄より大きい、雄は卵を雌の脊中へ乘つけてやる、小供は脚が丈夫になれば卵子から飛出すが、是迄には產卵してから殆んど八十二日もかゝる、雌は卵を砂の間へ產むが、之を見た雄は、いきなり其處へ走つて行つて、卵を後肢の間で挾み、雌の脊中へ持つて行く、夫から自分がトンボ返りをして、雌の脊の上へ自分の脊をのせて卵子を押付ける、三四度こんな事をして、暫らく休んで、又行つては同じ事を繰り返へす、子供が皆拔け出て了うと、雌は石や樹へ脊中を摺り付けて、穴だらけの皮を剝き、新しい皮をこしらへる。

猶「サウバージュ」といふ人の面白い話がある、

「ピパ」は薄暗い森の沼に住んでゐる、懶そうに蹲踞つて、硫黃のよーな臭氣を放つ、不活潑な蛙である、雄は「アリート」のように、卵を肢の間に挾んではゐず、雌の脊中へ穴を掘つて、其中へ一々の卵を入れてやる、穴は軈て六角になつて卵は其中で變態をする、子は獨で穴の蓋を破つて出るが、其時になると方々から頭や脚がによき〳〵と出て來る、見てゐると隨分面白いものである。

「ピパ」は南米のブラジル地方にゐる。

にるくろこぢる

此の名は其の棲んでゐる場所から來たのである、この鰐は、阿弗利加の大きな川に

は大概居るが、殊にパレスチナにあるツエザレアの近くのツエルカ湖或は鰐湖などいふ所に澤山ゐる、然しエジプトの方には已う殆んど居ない。

土人の間には已に銃器が行き渡つて居るけれども、土人共は此の怪物に對しては全く勢力がない、丈夫に出來た鎧を何なく打抜く銃丸でも、この「ニルクロコジル」を殺すのは中々六ケしい。

この鰐は水中では非常に運動が活潑であるが、陸に出ると頗るのろい、然し餌を追ふたり、逃げたりするには隨分早いともある、視力も聽力も鋭敏でよく仲間と群生してゐる。

どんな動物でも自分より力の弱いもの、時には同じ鰐の小さいのを、攻擊するが、只一つ「フロコジル、ウエヘテル」(「鰐のボーイ」といふ面白い名の鳥)といふ鳥丈は、頭や脊中の上へのつて荒れても、平氣で怒りもせず、默つて居る、然し斯樣に「鰐のボーイ」を特待するのは全く鰐がこの鳥の爲に大變な恩になるのである、即ち「ワニ」が陸へ上つて口を開いてゐると、何處からかこのボーイがやつて來て、恐しい口の中へ怖氣もなく頸を突込んで、齒の間に挾つて居る肉の片や、顎や咽喉に緊着いてゐる寄生虫などをとつてやる、又「ワニ」が河原に出て砂の上で日向ぼつこなどをしてゐる時に、怪しい者(鰐狩の人間など)が見えると、いきなり鈴を振る樣な鋭い聲を出して、鰐に危嶮の近いて來たことをしらせる、だから鰐も嬉しそうにして口の掃除をして貰ひ、又頭の上などで自由に遊ばせて置くのである。

この鰐は人間には餘程注意をして滅多に襲ふことをしないが、運動の自由な水中では遠慮なく食ひつく、啼くことはごく稀なことであるが、感情の非常に激した時には、往々、沈んだ振へ聲を出してなく、獅々や、虎の山も響くやうな大聲を出して吼へるのも恐ろしいが「ワニ」のやうに低い聲で啼くのも隨分いやなものであらう。

此の鰐は殆んど十分間毎に、呼吸する爲に水面へ浮き上つて來る、日のある間は仲間と一所に、川緣の砂の上などへ出て、日向ぼつこをしたり、寢たりして居る、日

暮方から起きて、魚や、川へ水を飲みに來るいろ〳〵の動物を捕へ始める、馬や、牛や、駱駝などをも食ふことがある、時には死んでゐる動物の肉をも食ふことがあるが陸上で餌を漁るといふことは決してない。

時には他の池や川に移る爲に、棲みなれた處を去ることもあるが、夫が出來ない時には元の棲家に止まつて、水が涸れて來ると、底の沼の中に埋まつて了う、次の雨期が來て水の出來る迄靜として、沼の中にゐる、交尾期になると、この「ワニ」は強い麝香のような香を放つので、どこに居るかといふことがよく分る。

雌は六十から百位までの卵子を砂の中へうむ、卵子の大さは鶏鳥の位だが、卵殼は夫より少し軟かい、産卵すると雌は、非常に注意して卵子を砂でかくして、他の動物に害されぬように番をする。

うんでから子になる迄には四十日程かゝる、子供がすつかり成熟すると、マダカスカルにゐる「リーゼンクロコヂル」のように卵子の内で面白い音をさせて啼く、啼くと云つて未だ口が塞つてゐるから、聲をだしてなくのではないが、腹の筋肉の收縮から音が出るのだろうといふことである、阿母さんの「ワニ」は此音を聞くと、直ぐに穴を堀つて小供を外へ出してやる。

卵子から出たての子供は、二十から二十八センチメートル位の可愛らしい「ワニ」である、若い時は成長が中々速かであるが、年をとると非常に緩くて、人が大きい鰐の年は大概百年以上である、といふ位である、この鰐魚は主にその麝香腺をとる爲に狩られるが、肉も多少は麝香臭い、土人には脂肪と一所に肉が中々珍重される。

昔「ワニ」は色々の藥にしたものであるが、今でも猶藥に用ゐて居るそうである。

與一　魚

魚には隨分ずるいことをして餌を捕るものがある、「アンコー」の或るものでは、頭の上に長い突起が出來て、其端に白い旗のようなものが着いてゐる、「アンコー」先生

頭上に旗を翳し乍ら趺座して待つてゐると、附近にゐる小魚共は波にひら〳〵と搖れてゐる旗を見て餌と思ひ、驀地に來て食をーとすると、餌と思つたのは全くの欺偽で、却て反對に「アンコー」の大さな口の中へ葬られて了ふ。

之は全く狡猾なやり方であるが、猶自分から活動して餌を求め、非常に巧みな方法を以て餌を捕へる魚がある。

此の魚は「トクソート」と云つてマレー地方の川に棲んでゐる、此處は多く昆虫を食ふが、此の餌になる昆虫の或る者は水の中にもゐる、餌を取るに恰度弓で射るよーなことをするから弓の射手とか水銃砲魚とかいふ綽名がついてゐる、與一魚と云つたのは狙ひが非常に巧みで百發百中だといふから、つけたのだが當つて居るかどーか？

さてこの與一魚は、方々を彷徨して、川の邊に生えてゐる草や樹の葉に、虫の止まつてゐるのを見ると、出來る丈けその虫の近くまで行つて、口へ水を一ぱい啣んで鰓を閉ぢる、夫から突然と水面上に頭の先を現はして、狙つた虫（蠅などの）に細い長い水の矢を射かける、虫は面を食つて水と一所に川の中へ落ちると、與一は下にちやんと待つて居て直ぐにそれを呑んで了う、射擊の上手なと云つたら殆んど受合つて外れるとはない、水中から見ると光線の屈折で、魚の眼に見える虫の在所と實際虫の居る場所とは、方向も距離も餘程違つてゐるのであるが、夫にも拘らず的を外さぬのは、全く長い間の經驗から習性になつた結果であろー。

ジャワ及びその附近では、「トクソート」を大事に水族館に飼つてあるので、觀客は蠅などをくれて樂んでゐるそーである、水槽中の溫度の調節などが出來ればこんな魚を水族館に飼ふのも面白いことであろー。

いろ〳〵の動物

動物にして天上に上るの榮を得たものは十ある。

1、「バラーム」の驢馬、之は「アキレス」の馬のように人間と同樣の言葉であつた

といふことである。

2、「ベルキス」の郭公、ボヘミヤ人の話に、「ヴァーヂン」の祭日には語のない動物ですら、巣も造らず、休んでお祝をするが、郭公丈けは休まないから自分の巣も保たれず、方々と流浪する（「ブリニー」の本に、郭公は常に他の鳥の巣には入つてゐる、とある）身になつたのだ、と云つてあるが、そんな郭公の中から天上するに至つたのでは、餘程善い鳥であつたろー。

3、「ノア」の鳩、鳩は基督教の美術では聖靈のシンボルで、露西亞では鳩は食はぬそーである。

4、「ヨナ」の鯨、「コルバート」教授の話では、この鯨といふのは「セタス」といふ星群で「ヨナ」といふのは、夫を三晝夜でもつて廻る月である。

5、「サレー」の駱駝、豫言者の「サレー」は偶像崇拜者なる「ヨンダ」が、お前が若しその石の中から駱駝を出せば今直ぐ改宗して「エホバ」を信じよーと云つたので、その通り駱駝を出して見せた、夫から此の駱駝は、町の中を大きな聲で、「いざ、乳のほしき者は皆來れ、われはそれを與へん」と云ひ乍ら、歩き廻つたといふとである。

6、「アブラハム」に捕はれて、「イサック」の爲めに犧牲になつた羊。

7、「ソロモン」の蟻、之は懶怠者を罰したといふえらい蟻である。

8、「モゼス」の牝牛。

9、「クラチム」の犬、之は「カトミール」といふ名で有名な七人の寐者の犬である人語が話せるので、穴から遂拂おーとしたその七人の若い人達に—我は神を愛する者を愛す、眠れ人々、われ御身等を守らん—と云つて其人等を眠らせ三百九年の間、食ひも寐もせずにそれを守つて居たといことである。

10、「マホメット」の驢馬、「アルボラク」alborak（光といふ意味だからその速いとが想像される）といふ名で、顔は人のよー、頬は馬のよー、鷲のよー、翼が

あつて聲は人と同じである、「マホメット」は之に乘つて、神の意を知る爲に天に上つたといふ。

猶此の他に

「クリスト」を乘せてジエルサレムに行つたといふ驢馬。

及び

シエーバの女王か、「ソロモン」を尋ねる時に乘つて行つたといふ驢馬

も時には天國に上せらるゝことがある。

神話に現はれた神には「アフロヂト」は美しいとか「ツオイス」は嚴正だとか、それには特長があるので、之等の神々には、古來(美術や文學などで)その特性に叶つた動物が配合されてある、「アフロヂト」(ローマの神話では「ヴイーナス」といふ、同じものである)の車をよく鳩が引張つたりしてゐる繪がある。

「ヂアナ」は元と伊太利の神であつたが、後遂に希臘の「アルテミス」と同一のものにされて了つた。月の女神である、常に澤山な女神共に侍かれて狩をするが好きだつたので、「ヂアナ」には牡鹿がついてゐる。

「ヴイーナス」は始めは春の神だつたが、だん〳〵と變化して、美の神から遂に愛の神となつた、愛及び美といふので「ヴイーナス」には鳩、白鳥などがついてゐる、雀も此神の附屬物であるといふが、どういふ譯からかしら?

「ヴイーナス」の出所に就てはいろ〳〵の話があるので、從て種々の名がある、「ヴイーナス、アナヂオメーン」Venus Anadyomene といふのは、海の泡から出て來たといふので、風のそよ〳〵吹いてゐる海の眞ん中で、水や泡にさら〳〵光つた裸躰の「ヴイーナス、アナヂオメーン」が口を開いた貝の上に立つてゐると、海豚のようなものが、澤山その周圍をとり卷いてゐる繪などがよくある。

「ミヂルヴア」は智と美術の女神で、ローマの神であるか、グリースの神話では「アテーナ」と同じである、「ミヂルヴア」に附屬してゐる動物は、梟である、元と梟はア

センスの市のエンブレムであつたが（雅典の附近には梟か多かつから）、「アテーナ」Athena 即ち「ミチルヴア」と、アテーチー Athena(Athens)と、語が同じであるといふ所から、梟は又「ミチルヴア」神のシンボルとなつた。

詩及音樂の神の「アポーロ」には、いろ〳〵の動物がつけられてある、鷹、白鳥、烏などはまだいゝが、ばつたや狼などがどうして「アポーロ」につくのだか、一寸妙に思はれる。

腦の目方

腦の目方は人類猿と人、及び同じ人間でも、人種と人種とに依つて、餘程異なつてゐる、その腦の目方（比較的の）が、やがて生物の智能の、發達の程度に比例する樣な傾向がある上は、いろ〳〵の動物や人間などの、腦の目方を比較して見るのも、面白いとである。

歐洲人の腦の平均の目方は、男が一三六二グラムで、女は一二一九グラムである、男は三〇から三五才の間で、一四一九グラムといふ最大の目方に達するが、女の腦は早く已に、二五才と三〇才の間で發達の最高點に至る、女の心の男のよりませてゐるのは、之でも分る。

支那人の腦は、平均、歐洲人のより重い、支那からも、もう偉人が出そーなものである。

黑人の腦の目方は、平均一二四四グラム（但し男）であるから、歐人の女のより重い「シンパンゼー」のは三五〇から四〇〇グラム位である。

大きくなつた「シンパンゼー」の、腦と體全體との目方の比は、一と七〇或は八〇位だが、普通の人（脂肪などで、無茶に肥つてゐない、中肉の人）の比は、一に對する三五か四〇位の比で、人間のは無論腦が比較的に「シンパンゼー」のより重い、然るに兩方小供の腦をとると、其差がそれ程に大きくない、即ち、若い「シンパンゼー」

の腦量と體量との比は、一と二五であるのに、人間の小供のは一と一八である、成長すれば無論非常な差はあるが、小供の時は人間も人類猿も、いろ〳〵の點に於てよく似てゐる、此の類似が又腦量の比の類似と一致してゐるのは、面白い事實である。

人間の腦量も、絶對的の量では、鯨や象などの大きなものにはかなはない、又比較的の量では、猿の小供や「シングフォーゲル」といふ鳥などには敵はない。

「ランケ」は、田舍の人よりは都會に居る人の方が、腦量が大きいといふことを發見した、又「ブローカ」といふ人は、巴里の寺の墓にある、昔からの頭骨を見ると、確かに、いくらかづゝ、その腦を入るゝ容積の大きくなつてゐることが分る、と云ふてゐる、都會の人は頭を用うとが多いから、自然かゝる現象の起るのも當然のことであろう。

地下の人

變動物學は範圍が廣い、苟くも動物といふものに關係して、自分で面白いと思つたことは皆かく、人も動物である、故に地下の人もかゝねばならぬ。

「サー、ジョン、ラボック」は自然の美を認めさせよーとして、

一日を假りに、一生位の長さに引延ばしたとすれば、朝と夕の色の美しさはどんなであろー？

黄金色に光つた朝の光は、無上なる幸福の色である、然し吾々は、常に目になれて居る處から、自然の美しさを見逃がして了う、

と、やゝ窮した假定を持出したが、「チッエロ」は昔ながら、流石にうまいことを云つてゐる、

先づ地下に人間のよーな者がゐて、その家は心地よく、美しい燈火で輝やいて居

り、彫刻や繪や、あらゆる飾りは備はつてゐるが、然し、未だ決して、地上の世界へ出たとがないとする、彼等は只噂で、頭の上にはいろ〳〵の不思議な神が居るといふことを傳へ聞いてゐる。

然るに不意に地が裂け、或る力の作用で此の地下の人が、人間の住んでるてふ地上に、現はれ出たらどうであろー！

不意に、目の前に地球が見える、大空が見える、大洋が見える、空には大きな雲といふものが泳いでゐる、暴風も走つてゐる、大きな、立派な、そこら中を光らしてゐる太陽といふ不思議なものがある。

一面に暗くなると、びか〳〵空一つぱいに星が光り出す、月といふものが、毬のよーに團くなつたり、小い羊の角のよーに細くなつたりする、時々には、光つた尾を引張つた、慧星といふ星の客が、來ては又見えなくなる、そして、こんな物は皆整然として、ちつとも亂れてゐない。

こんな色々の光景を見た彼等は、屹度此處には神がゐて、是等の不思議な物は、悉くその神の仕業であると信じるに違ひない。

比喩が甘いから、誰も成程と思ふ。

蛇に似てゐる虫

蝶の蛾の幼虫は、多くは葉の上にゐて、葉を食ふので、小い時は、只青くて葉の色に似てゐるが、だん〳〵大きくなると、葉の脈に似通つた筋などが出來る、又色や形などで、一見して分るよーな特徴のあるものは、大概味がまついか或は體に毛があつて、鳥などに食はれないよーにしてある。

然し「エレファント、ホークモス」といふ蛾の幼虫は、體も隨分大きいし、又大きい目のよーな點が、體にあるので一層目に立つと云つて前のよーに敵を防ぐ爲の毛もない、然し此の幼虫は、よく蛇に似てゐる、殊に目のよーな點があるので、一層そ

ー思はれる、其の上その目の付いてゐる輪は膨れ上つてゐる、又何か危險に遭遇する時は、頭と體の前の部分とを、引込む癖があるから、恰度小さい爪虫類のよーな格巧になる。

小さい鳥などが、此の幼虫に就て恐れてゐるとは、(無論夫れ程恐ろしくもなし、毒もない虫であるが)「ワイズマン」の實驗したとでよく分る、即ち、

「ワイズマン」は、いつも穀物などを入れて鳥にくれる皿に、此の虫を數匹入れて置いた、直きに雀や其他小さな鳥の群が、いつものよーに御馳走を食べよーとして集まつて來た、始めに來た一羽は、皿の縁へ止まり、中へ下りよーとした處が、いやな虫が居たので、頭を上へやつたり、下へやつたり、妙な身振をしてゐた、小さい鳥はよくこんな風をする、而して、虫の傍へ行くのが恐ろしいよーに見えた、夫からだん〳〵と集つて、十二羽許りになつたが、皆驚愕したよーな顔をして視て居るので、一羽も皿の中へ下りる者がない、來るといきなり何も知らずに、皿の中へ飛び込んだ一羽は、虫の居るのに氣がつくと、驚いて外へ逃げ出した。

暫らく待つてから「ワイズマン」が虫を取り去つてやつたら、雀共は喜んで、直ぐに穀物を平げはじめた。

「ヤマカガシ」のよーな、體に斑點のある蛇に似た幼虫もある、或る大きな印度にゐる幼虫は、いやな聲を出して、敵を脅かすものさえあるそーである。

きつゝきの帽子

保護色は面白いものである、砂漠にゐる獅子は、他の砂漠動物と同樣に、砂色をしてゐる、叢の中にゐる虎は縦に斑がある夫れが爲め、直立してゐる深い草の中では虎は中々見分けにくい、豹や樹猫は、葉の間をもれて來る日光の影のように、美しい斑點がついてゐる、小な穴から入つて來る光線の影は、圓いか、或は楕圓形になるものである。

或るきれいな熱帶の蝶は、翅が黑い處へ、綠色に光つた點が、ちよい〳〵ついてゐる、之が、影から日光の中につき出て居る、羽狀復葉の葉の端に、頗るよく似ている、

「ベーツ」の話によると、自分はそれ程不味でもないが、鳥などの攻擊を免れる爲にある他の、鳥の嫌ひな、いやな味のする蝶に似てゐる蝶がある。蟻にそつくりな蜘蛛もある。

爬虫類や魚では、周圍にあるものゝ色に應じて、直ちに色を變へるものがある、章魚や烏賊は著しい例である、夏の頃、海で、何か藻のようなものが並んで浮いて來たなと思つて見てゐると、ふとそれが水色に消えて見えなくなる、變だと思つて釣棹の尖などで、そこらをかき廻わすと、黑いスミを一面にはじいて逃げて行つて了う、夫れは小い烏賊の子である、青い牧場の間にゐる、羊の毛の白いのは變だ、といふとであつたが、羊飼などの話によると、羊に之れ程いゝ色はないので、遠くから見ると、どうしても岩としか見えぬそうである。

「カハセミ」の青い輝いた色は、博物館などの中で見ると、非常に著しく見えるが、その自然の棲家である川緣などでは、却つて水の面を射る光線の色と、分ち難いと云はれてゐる。

「キツ、キ」の奇麗な色の毛は、樵夫など、森の中に居る者の着物に、即ち青い服や赤い帽子に、よくにてゐる、日本では、此の説明は妙である、森の中に住んでゐる人は、赤い帽子や青い服を着て居るのが多いとは云へぬ、然し英國あたりでは、或はそうかもしれぬ、又一寸離れて見れば「キツ、キ」が人と見えるかもしれぬ、樵夫などに似てゐるとは、面白い云ひ方である。

蟻の仲間

蟻に就いてはラボック、フオレル、グールド等色々の人が研究をしたが、殊にラボッ

クのは面白い、以下は主としてラボックの話である。

英國に居る蟻には三十種以上ある、其の多くの者は自分が飼つて見た、生命は比較的に長い、七年活きてゐた職蟻もあつたし、又ある女王は十五年も活きてゐた蟻の社會は小供の他に、仕事を何もしない雄と、翅のない職蟻と、或は夫より以上の女王から成立つてゐる、女王は始めは翅があるが、交尾する爲に空中に飛び立つた後は、再び巣を出ないから、翅の必要も失せ、なくなつて了う。

職蟻は、ある特別の時の外は卵子を産まない、仲間の用事をあれこれとしてゐる、殊に若い職蟻は巣の中に止まつて、部屋を拵へたり、小供の世話などをしてゐる、小供はその年齢に依つて分けられてあるから、自分の巣の中は、恰度澤山の級がある學校のようになるとがあつた。

女王は只眞の母であるのみだが、職蟻共は常に女王の方へ頭を向ける、恰度女王の顔を見ると、何か樂みであるやうに見える。

ローヤル、インスチウションの展覽會で、一つの巣から他の巣へ、蟻を移さうとしてゐた時に、自分は過つて、女王を潰して、とう〳〵殺して了つた、處が他の蟻は、それを捨て去らずに――職蟻などが死んだのでは、よく其儘にして行くことがあるが――新らしい巣へ搬んで行つた、夫から又自分が與へてやつた、夫よりは一層大きい巣へと女王を移して、數週の間、恰度活きてる時のように、その周圍へ集まつてうぢ〳〵してゐた、之を見るとどうしても、蟻共は女王の死を悲みその又復活するとを望みつゝあるものとしか思はれぬ。

一つの社會を組織する蟻の數は非常に多くて、時には十萬にも達するとがある、然し同じ仲間に屬する蟻の、互に喧嘩したといふのを見た者は、未だ曾てない。兄弟でも喧嘩する人間などゝは、餘程變つてゐる。

同じ巣の蟻は、互に識別するのに、或る印か符牒があるといふとであるから、自分はそれを試驗する爲に麻睡劑を用ひた。始めにクロ、フオルムでやつた處が蟻

は死んで了つた、死んでは仕方がないから、今度は酔はせようとした、之は思つてゐたより六かしかつた、何故ならば、どの蟻も自ら進んで酔漢になろうとする者はなかつたから、然しウ井スキーの中へ五六分間入れて置いて、やつと酔はせることが出來た。

自分は、一つの巣から二十五、他の巣から二十五、都合五十匹の蟻を取つて、死ぬ程酔はせ、繪の具で印をつけて、一方の巣の蟻が、餌を食つてゐるテーブルの上へのせて置いた。

テーブルは蟻が逃げるとのできないやうに、周圍を堀で取りまいてある、近くの餌を食つてゐた蟻は、程なく酔ひ潰れてゐる蟻を見附け出した、彼等は自分の仲間が、こんな淺ましい墮落した樣になつてゐがのを見て、喫驚したやうであつた そして吾々が酔漢に對して困るやうに、又どうしていゝか分らないといふやうに見えた。

然し、暫らく經つてから、彼等は皆その酔漢共を搬び去つて了つた、他の巣の酔漢をば堀の處まで引摺つて行つて、水の中へ投りこんだが、酔つた自分等の仲間をば、どうかこうかして巣へ連れて行つた、そこで眠つてゐる間に、酔つた蟻はだん〳〵と醒めた。

これで、印や符牒などを交はすことが能ない時でも、蟻がその仲間を識別することのできるのは明かである。

自分は屢々一つの巣を二分して、双方の交通を斷つて置いたが、一年九ケ月といふ長い時日の後でも、又兩方合せれば、互に識つてゐるやうに至極仲がよく見えた、然るに、例令同種の者でも、二つ異つた巣の蟻を合せると、直に爭鬪を始める、自分は何度となく、一の巣から他の巣へ蟻を入れて見たが、入れると直ぐ脚や觸角を摑まへられて、酷い目に會つた。

狼などは、病氣になるか、或は怪我でもすると、他の狼が來て追拂ひ、甚しい

のは、殺すともあるといふとであるが、蟻では、決してそんなとはない、自分の飼つてゐた蟻の一匹は　第一の變態をする時に、甚く脚を痛めて、仰向になつて悶いてゐた、然るに三月の間此蟻は、他の仲間の爲に親切に看護された。

もう一匹は、矢張り同じようにして觸角を痛めた、自分はどうするかと思つて、注意して視て居た、五六日の間は巣の中に居たが、或る日外へ出ると、同種ではあるが別の巣の蟻に出會した、直ぐに其處で喧嘩が始まつた、自分が中へはいつて別けてやると、敵の爲だか、或は恐らく、自分の誠ではあるが不作法な親切の爲だか、前に怪我をした蟻は、一層ひどく負傷したらしく、横になつてそこへ倒れて了つた

それから五六匹の蟻が傍を通つたが、皆知らずに行つて了つた、遂に一匹の蟻がやつて來て、觸角でもつて叮寧に檢査をし、やがて靜かに巣へと連れて行つた。

誰も、此の蟻に親切といふ、人道のある一特質のあるとを否定するとは出來まい、一匹の蟻(蜂も)が何か餌を探し出すと、忽ち多くの仲間が集まつて來て、その餌を巣に引張つて行くとは、誰もよく知つてゐる事實である、然しその仲間共には、發見者の蟻が―餌があるから來い―といふとを通知するのであろうか、夫れとも發見者の蟻が、餌の一部分を持つて返つたのを見て、只無言の間に、それへ尾いて來るのであろうか、自分はそれを確める爲めにいろ〳〵の實驗をした。

ある寒い朝、自分の蟻は、殆んど皆巣の中に潜つてゐたが、只一匹、巣から一間許りの處で餌を漁つてゐた。

自分は一匹の死んだ蠅を、ピンでコルクにとめて、その蟻のおき前の處へ置いた、いきなり蟻は夫れを曳いて行かうとしたが、驚いたことにはいつかな動かない。

彼方へ曳いたり、此方へひいたり、えい〳〵二十分許りも引いて居たが、と―〳〵思ひ切つたか眞直に巣へと返つて去つた、其の間は一匹の蟻も出て來なかつた、其の時外に居たのは全く彼れひとりであつた、巣へはいると直ぐに半分も經たぬ中に前の蟻に尾いて十三四匹の仲間が出て來て、此等の蟻はと―〳〵、蠅をコークから離

してやがて勇ましく巣へ引摺つて來た。

此の始めの蟻は、巣へは何にも持つて來なかつた、だから、どうしたか分らぬが――自分が餌を見付た、それを曳いて來るのだから、來て手傳つてくれ――といふ意味を仲間に知らしめたに違ひない。

「ヒューバー」が始めて發見したやうに、ある蟻の種類は奴隷を使用する。

非常に奴隷の世話になつて、食物は澤山あつても、夫れを食べさせてくれる奴隷が居なければ、餓えて死んで了うといふ贅澤な蟻もある、そんな蟻でも、一週間に一度、一時間位奴隷をつけて、清潔にしたり餌をやつたりすると、非常によく發育するとを自分は實驗した。

「フォルミカ、フスカ」といふ蟻の巣の屋根を去ると、蟻は何か蔭れる所を探がさうとして、方々走り出した、そこで一部分丈け破つて、蔭れ家を拵へてやると、一匹の蟻がそこを見付けて入つて來た、然し此の大膽な蟻は、決して獨りで其處に靜としては居ない、直ぐに仲間を探しに出た、一番始めに見出した蟻をば、齒で交へて、毬のやうに投げながら（之れが、此の種類の蟻では仲間を搬ぶ方法である）自分の見付けた前の蔭れ場所へはこんで行つた。

今度はふたりで出て來て、二匹の蟻を搬び、さう云ふ樣にして、どう〳〵、仲間を悉く安全の場所に連れて行つた。

之から見ると、蟻には公共の念があると思はれる、又此蟻では、他の種の蟻程、通信力が完備して居ないといふとが分る、蟻は人間のやうに、家畜をも飼つてゐる、家畜の主なものは「アブラムシ」だが、「アブラムシ」は、恰度牛がミルクを人間に供給するやうに、蟻に甘い液を出してやる。

蟻は「アブラムシ」を保護してやる許りでなく、來年の春甘露を得る爲に、秋早くその卵子を集めて、注意して寒い冬を越させてやる。

猶昆虫で蟻に飼はれるものは此他に多くある、その中で或る者は、始終地下の暗

い蟻の巣の中に住んでゐる處から、目が退化して全く盲目になつたものもある。蟻はどこにも澤山ゐるから、實驗が誰にも出來る、やつて見たら面白かろうと思ふ「アブラムシ」のゐる處には、大抵蟻が彷ふて居る。

猿とマッチ

猿の惡戯をするといふことは、誰もよく知つてゐるとであるが、「エレンドルフ」といふ人は面白い話をしてゐる、此人の飼つてゐたのは、頭の白い、黑猿だつたといふとである。

猿を始めて自分（「エレンドルフ」）の室の内へ放すと、室の内にある物を一つ〳〵尋ねて行つて檢査をし出した。

終にマッチの函を一つ拾ふと、どうかこーかして、とー〳〵夫れを開けて了つた猿はやがて三四本のマッチを取り出して、よく臭をかぎ、机の上へ放り出したから、自分はその内の一本をとつて、火を點けて彼に見せた、猿は喫驚して、小さい目を大きく見開き、目を放さないで、じつと焰を見てゐた。

そこで自分は、二本、三本と擦つて見せてやると、猿は怖々ながら片方の手を出して、マッチを取り、顔の前へ持つて行つて、驚いたよーな風をして夫を視てゐた、火がだん〳〵と指の方へ近いて來たので、猿はマッチを放り出した。

自分は函を閉めてテーブルの上へのせた屹度猿が直ぐに夫を取るだろーと思つてゐると、ちつとも取ろーとはしない、只函の側へ座つて、眺めたり、方々の臭をかいだりしてゐる、今度はこつちへやつて來て、自分に體を磨付け乍ら、何か要求するとがあると云つたよーな聲をした、恰度一之は何ですか？といふよーな顔付をしてゐた。

夫から又函の處へ行つて、やつとの事開けはしたが、さてマッチを掴まうとしないー、ぐづ〳〵して、又自分の方へやつて來て、まだ何かして欲しそーに見える、

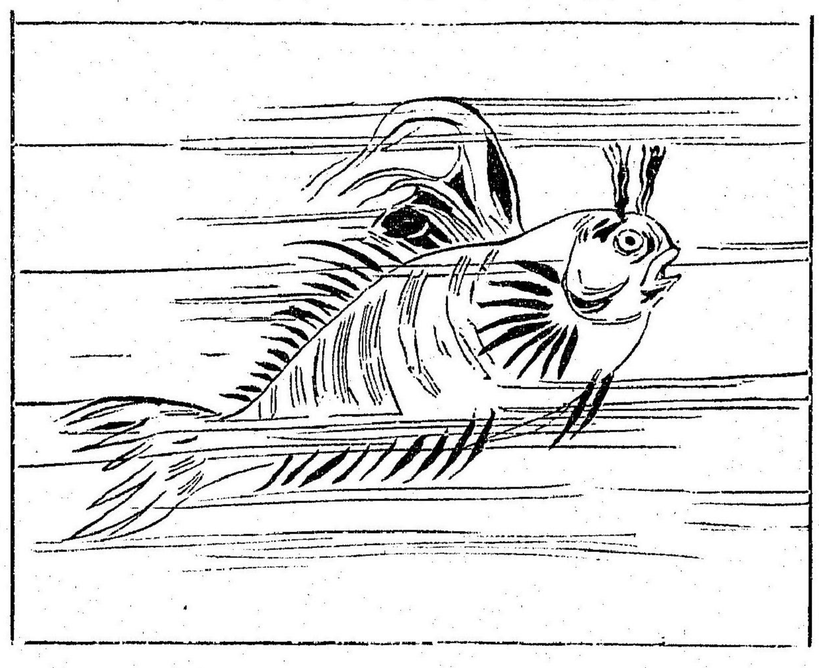
そこで又自分が火をすつて見せると、いきなり彼は一本のマッチを取つて、藥のない面ですつた、そこが破れると、急いで函を轉倒してやつたが、今度はマッチの穂のない方ですつてゐる、夫を又持返させてやると、やつとの事に火が出た、すると猿は大喜で、手一ぱいにマッチを掴み出して、火をすつては嬉しがつてゐた。

動物の婚禮衣

動物でも交尾期になると、晴衣をきるものがある、人間では、しやれるのは多く女だが、一般の動物では反對に雄丈けである。晴衣と云つて、別に新調するでもなし他から借りて來るのでもない、雌雄淘汰の結果、羽や毛の色が其時期にのみ美しくなつたり、或は新に、角や鷄冠などが出來たりするのを云ふのである。此の婚禮衣は交尾期が濟むと、自然に消え失せて了う、勿論雉子や家鷄などのやうに、雄が常に美しくなつてゐるのもあるが、こゝに婚禮衣と云ふのは、交尾期のみに現はれて、平時には存在して居ないものを意味するのである。

さて、「カリオニムス、リラ」といふ魚の雄は寶石のやうに光る、斑點のある晴衣をきる、然るに雌の方は、誠に詰らぬ魚なので、英國の漁師共は、雄を別種の魚だと思つて、「おしやれ龍」といふ奇妙な綽名をつけた。

晴衣を着たる蝶魚



「トゲウオ」のやうに、海中に巣を作る魚の一種に、蝶魚といふのがある、頭の上に觸角のやうな角が二本あるし、又形がやゝ蝶に似通つてゐるので、斯う云ふ名がついてゐる、此の魚の雄は、雌がその巣の近くへ泳いで來ると、忽ち色が變つて美しい魚になる。

雄が來たので、耻かしいと思ふのか、又何と思ふのか分らぬが、此の變色するといふ事實によつて、雄に此時或る一種の感情が起るといふことが想像される、只雌の形が、眼球から視神經を傳つて、腦に至るといふ生理的の作用が、刺撃の原因となつて、變色を若起すとは考へられぬ、夫よりは一層複雜な、人間の持つてゐる或は種の感情に似た（或は全く同じ物であるやも分らぬが）ある微妙な感情が、脊椎動物中の一番下等な魚類にも、亦あると見える。

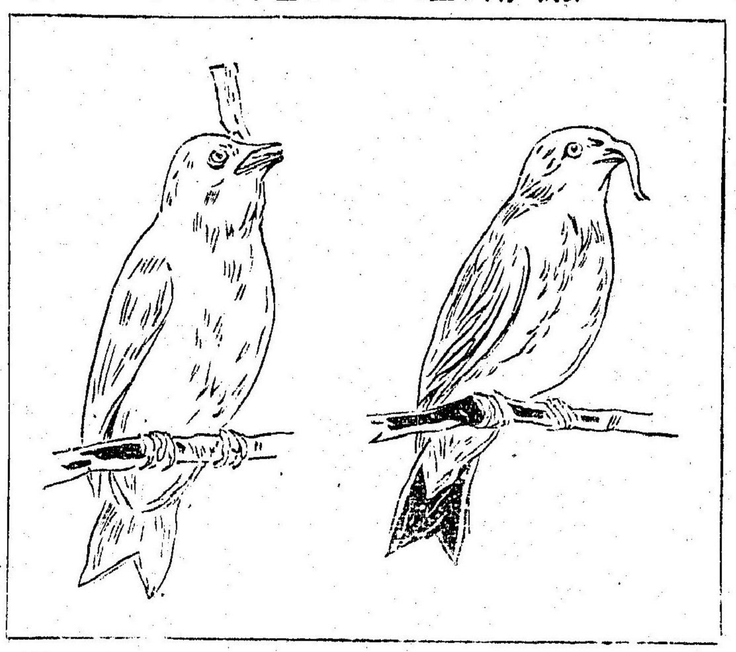
「イモリ」の一種は生殖時期になると、脊中の中央に、鋸のよーな著しい突起が出來る、吾々には夫れ程美しいとも思へぬが「イモリ」仲間では、餘程の美衣であろーそれと同時に、躰の色が非常に濃く、けばけしくなる、後になると、脊中の突起も躰の色も、消えて了まう。

最も華美な晴衣を着るのは鳥類である

晴衣の種類にはいろ〳〵ある、長い尾の出來るのもあれば、咽喉部の美しくなるのもある、又頸の周圍に立派な羽のカラの出來るのもある。

「テトラオ、クビド」といふ鳥は、頭の兩側にオレンヂ色のきれない袋が出來る、此袋は「クピド」が雌を呼ぶ時に鳴くと、大きく膨れ上がる、恐らくは蛙の鳴袋と同樣の作用をなすものであろ

鈴鳥（角の立てるものと垂れたるもの）



ーと云ふとである。

鈴鳥といふ鳥の色は、平生は灰綠色であるが、晴衣は雪のよーに白くなる、それと同時に、羽子で被はれた五センチメートルから十センチメートル位の、光つた黑い角が、一本か、二本か、或は三本、頭の上におつ立つ。

此の角は生殖時期でない時は、圖にあるよーに、だらりと頭の横へぶら下つてゐるのである。

此の外、雄で晴衣を着るものは澤山ある。雄の晴衣をきるものは、前にも云つた通り、無論雌雄淘汰の結果であるが、之に反して、雌の概して醜いのは、いらぬ算段して美裝るのも面倒であるし、其の上、派手になれば敵の目にもつきやすく、生活上大に不利益であるからである。

然し雌だとて、少しはおしやれをする例外がないではない、無論例ば僅かだが「リンケウス、カペンシス」や「ファロブス」などといふ鳥は、雌と雖も中々美しい。

是等は恐らく、生活狀態の必要から起つて來た例外であろー。

れいぼあの巣

レイポアといふのは、熱帶地方にゐるフラミンゴーのように、砂でもつて塔狀の巣を作る鳥である、レイポアの巣に就ては、ギルベルトといふ人の面白い話がある、以下は主としてその話である。

今朝(千八百四十二年の九月廿八日)自分は今迄屢々レイポアの卵に就て搜索したが、遂に成効したとのない、深い森の中へはいつて行つて、自分は、自分に伴ふて來た土人が、餘り奥深く入つて、鳥の產卵する地に近くのを妨げたから、まだかく迄内部へは進入しなかつた、半時間許りの後に、高く砂で積み上げられたレイポアの巣を見付け出した、然し其の巣は叢の中にあつたので、自分等は其の叢の中へ分け入らねばならなかつた。

此の巣の底深く蔭れてゐる卵をはやく見たさに、自分は土人を追ひ除けて、自ら巣を堀らうとした、此の擧動はやゝ土人の氣を損じたらしく土人は

今迄こんな巣をいぢつたとのない者は、屹度卵子を破るから、夫は私にお任せなさい

と云つたので、自分は其の諫言を納れた、土人は直ぐに巣の上を堀つて、中央に大きな穴を拵へ始めた。

殆んど二呎も堀ると、大きな卵子の尖つた端が二つ見えて來た、自分は嬉しいやら驚いたやらで小踊をした、空氣に觸れると卵殼が著しく胞くなると云ふので卵子の周圍の土は非常に注意をして除つた、自分は難なく大きな卵子を得たので、大喜で又飛び上つた。

百歩許り隔つた處で、自分等は第二の巣を見出した、前のより、大きくして中には卵子が三つあつた、方々と搜索する間に猶八つの巣を見たが、その八つの中にはどれにも卵子はなかつた。

ある蛇では、草肥などの中へ卵を産んで、其醱酵熱によつて、卵を孵化させるが、「レイポア」も矢張り同じ事をするのである、「レイポア」の巣に中には濕つた草などがいれてある、之から又前の話の續き、

英國で長い間肥料の層に就いて研究した「ドラモント」は、植物質の醱酵によつて卵の周圍に起る熱は、華氏の八十九度に迄達するといふことを觀察した。

自分が見た最大の巣は、周圍が二十四呎、高さが五呎あつた、巣の中には、まだ植物質の層が冷たく濕つて居て、卵子を受ける迄に至らないものが澤山あつた、自分は此鳥が卵子を産む前には、一度此の層を引くり返して、又土でもつて夫れを被ふものだと思ふ。

自分が其中に卵子のあるのを見た巣は、悉く其表面が平滑になつてゐた、「レイポア」の巣をよく知らない者は、屹度之を(蟻の塔)と思違へるに相違ない、之に反

して中に卵子のない巣は、上に穴が開いてゐる。

卵子は恰度塔の中部にあつて、互に三吋位つゝ隔り、同一平面上に圓く配置されてある、卵の容積は中々大きく、縦の直徑が三吋と四分の三、横の直徑が二吋二分の一、目方は八オンスある、色は、青いのもあれば、又赤黒いのもある。捜索中脚跡丈は見たが、「レイポア」といふものは一羽も見ない、巣から二哩許り隔つた、水の干た沼の中で脚跡は澤山見た、之からも此鳥は其の産卵地たる森の中に棲んでゐないとが分かる、土人の話によると、此鳥は日暮方巣の近くに蔭れて居て、其の來るのを待つてゐなければ、決して捕へるとは出來ない、自分は數時間坐つて待つてゐたが、遂に一羽も來なかつた、土人の不忍耐は終に自分をして其處を去らねばならぬよゝにした、然し自分は或棲の傍で遂に一羽の「レイポア」を見出したが、もう餘程暗くなつてゐたので、夫れを打ち取るとの能なかつたのは、何より殘念である。

かめれおん

元來二個である生物が、體のある部分に依つて互に癒着して、一つになつてゐるものゝ例は種々ある、それが片輪であるのもあれば、又その生物に取つては普通の現象であるともある。

人間にも其例は澤山ある、一七〇一年に生れたハンガリーの姉妹（同時に生れた者を捕へて姉妹とは少し妙だが）で、ヘンナとヂユヂスといふものは、二十二の齡まで活きて居たといふとである、又ソース、カロリナの黒人でミリー、クリスチナといふのも其例で、此二人はバーニユームの博物館で見世物にされたそゝである、其他ポヘミヤにもロザリー、ヨセフアといふ姉妹がある、シヤムにも、一八七四年に六十といふ高齡で死んだといふ二子がある、無論こんな例はまだ外に澤山あろゝが上に掲げた者の中で、女の多いのは一寸面白い現象である。之はまだいゝが、外形

上全く一個の動物であるのに、恰も異つた二個の者が、其中に生活して居るよーな、動作をするものがある、ベアードといふ人の近頃の話に、

カメレオンの體は全く左右相稱に出來て居るが、眼は各獨立に働いて、夫々の知覺の中樞(二個の中樞があると假定して)に、別々にその印象を運んで行く(左は左、右は右)、だから此の動物が或る刺擊を受ける時には、恰度二個の動物が一體の中にあるよーな運動をする、體の各半分はてんでに、自分の好きな方へ行かうとして、運動の調和といふものが少しもない、だから、四本の脚のある脊椎動物の中で、泳ぐとの能きないのはカメレオン許りである。

カメレオンを水の中へ落すと、非常に喫驚して、度を全く失つて了う、丁度酒にでも酔つたよーに、ぐるぐると水の中で轉倒してゐる、夜、蠟燭を持つて、カメレオン全體を一度に目を覺ましないよーに、そつと立ち寄ると、火に向いた方の目は開いて、運動を始める、同時に其の側の體の色も變り出して來るが、反對の側の目はまだ〳〵確つかり閉ぢてゐる、運動もしなければ、色も少しも變らない。

カメレオンの色に就ては、古からいろいろの話がある、一人の人が、カメレオンといふのは誠に白くて美しい動物だ、と云と、其の友達が、いやそんな事はないあれは青い動物だと、各々自分が實見してゐる所から、所信を曲げないで喧嘩になり、ねー君も見たと云ふがあれは青いだろーと、丙なる人に勢援を乞ふといや、青くもない僕はたつた今見て來たが色は赤かつた、と之も心もとない挨拶に、こんな處で慇じひ爭論をしてゐるより實際動物を見ての上で果して誰が正しいか定めよーじやないか、と三人急いで動物の居た處へ來て見ると、此時カメレオンは何かの要求からで黄色い色をしてゐたので、皆間が抜けて互に顔を見合せた許り何とも云はないで別れて了つた、と云ふよーな話もある。

兎に角カメレオン程、周圍の狀態に應じて變色をするものはたんとあるまい。

カメレオンはトカゲの一種で、尾を除いて普通七寸位のが一番大きい、尾は割合に長くて體位はある、指は五本づゝあるが、二本と三本と二組に分れて、夫れが合着して鸚鵡の指のよーになつてゐる、雄は尾の基部が太くなつてゐるが、雌は細い之でもつて雌と雄とを識別することができる。

肺は大きくて、殆んど體全體に配布されてゐる氣胞と連絡してゐるから、肺が膨らむと從つて此の氣胞も膨らんで、體がいくらか透明になる、又カメレオンは食物を全く食はないでも、數週間は元氣よくしてゐる、昔カメレオンは空氣を食つて活きてゐると、仙人でゞもあるよーに信じられてゐたが、之は全く前のよーな事實から來たのであろー、左右の目玉は、全く獨立に働き得るので、片方が上の方を見てゐると、片方は一心に下にゐる蠅などを狙つてゐるとがある、此動物は頸が自在に廻らないし、又運動が比較的遲鈍であるから、前のよーな特種の動作を目玉がし得なければ、頗る不自由なものになる。

一時カメレオンは、虹の色を其の儘、どんなにでも色を變へ得るといふよーに想像されて居つたが、そー迄は行かない、普通の色は青い灰色掛つた色であるが、附近の狀態に應じて、綠色或は、薄い赤の斑點のある黃色、時には殆んど白と見紛う程の青白い色に變色するとがある。

エフエスの近く、古い壁を、一匹のカメレオンが上の方へと這つて居た、壁の石は黑かつたが處々に白い大理石は入つてゐた、だん〳〵と上つて大理石の上へ來ると、カメレオンの色は次第に變つて殆んど見え分かぬ位になつた、云ふ實見談もある。

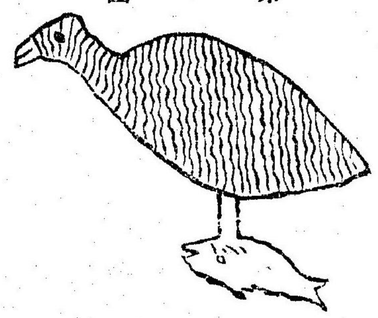
ぱぷあ人の繪

メラヂシア Melanesia と云ふのは、北はニューギニアから南はニューカレドニア、東はフイジー島に至る多くの島の一群を云ふので、之れ等の島は、地理學上及び人

類學上類似の性質を持つてゐるので、一群にしてある、「ぱぷあ」Papuan といふのは、此メラヂシアに一般に廣がつてゐる人種である、然し「ぱぷあ」人は、之よりは一層西のフロシス、チモルなど云ふ島には實際に住んでゐる。

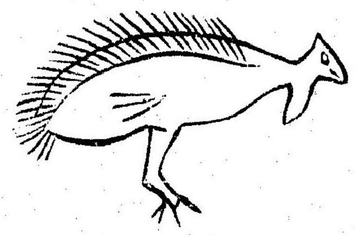
さて「ぱぷあ」人の繪にはいろ〳〵あるが、皆不自然で、小供の畫いた繪のようである、然しその小供らしい、單純な所が却つて面白いので、どこか不折の繪に似てゐる、怪しい畫家の繪よりは寧ろ面白いように思はれる處もある。

第一圖



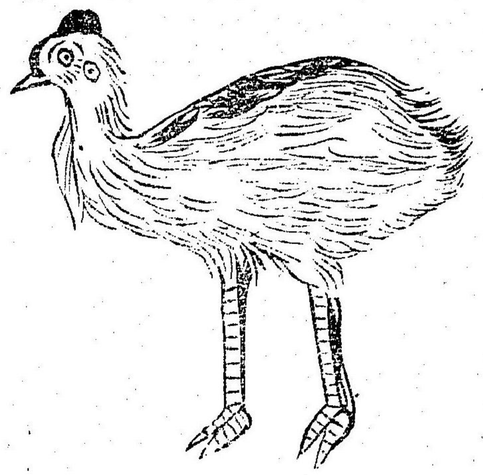
之は（第一圖）トレス海峽（ニューギニアとクヰンスランドとの間にある海峽）の中にある島から得た、「おじろわし」Haliaëtus albicillaが魚を捕つてゐる繪である、全體をぎざ〳〵の折線で繪いて、然かも、鷲の脚の線を其儘直ちに魚の體に移らせてあるなどは、餘程面白い書き方である、アンプレッショニストの基を已に「ぱぷあ」人がなしてゐるようである。

第二圖



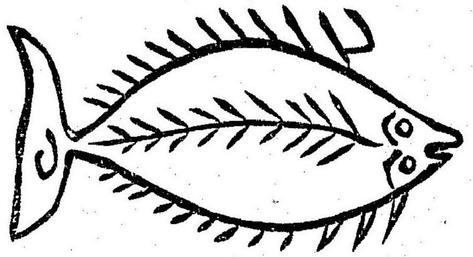
第二圖も矢張トレス海峽の島から得たもので、「ひくいどり」Kasuar の一種である、是れは折線をも用ひず、形も餘程自然に近く、甘く繪いてある、脊中の毛は此の鳥が普通の鳥のような羽を持つてゐず、寧ろ獸の毛のようなものを持つてゐるので、こんな風に畫いたのであらう。

第三圖は實際の「ひくいどり」の繪である、「ぱぷあ」人のを之と比べて見ると、咽喉の處の突起や、頭の上の隆起の二段になつてゐる處など、割合に描寫が精密である。



第三圖

第四圖

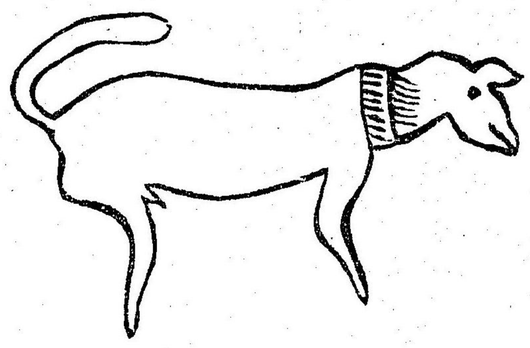


第四圖はカイゼル、ウイルヘルムス、ラントKaiser Wilhelms-Land（ニユーギニアの東北端ビスマーク群島の方に向つてゐる獨逸領の地）といふ所から獲た魚の繪である

之は、目が二つ體の一方に付いてゐる事や、鰭が長く體の過半に渡つて存在してゐる事や、上下兩顎の平衡してゐない所など、「ひらめ」によく似てゐる體の中央に鰭のようなものゝあるのは、餘り著しくて、些と妙だが、まさか「ばぷあ」人が魚を立て置いて其の平面圖を作るような事はしまい、それに、魚には大概中央にや、著しい筋の通つてゐるものである。

「ヂンゴ」Dingo。或は「オーストラリア犬」Australian Dog は、オーストラリヤ及び其北方の諸島にゐる犬の一種である、野生のもあるが、土人は此の犬を飼つて、可愛がつてゐると云ふとである。

第五圖は、その「ヂンゴ」の繪で、英領ニユーギニアから得たものである、頸の邊に摸樣のあるのは、恐らく頸輪か何か箝めてゐるのであらう、之からでも土人の飼つてゐるものだといふことが想像される、尾を擧げ、脚を曲げてゐる處から見ると、可愛らしい、從順な動物のやうであるが、一寸見た處では、犬よりは寧ろ、稻荷さんの狐のやうに思はれる。未開人の繪には、動物や人などが多くて、風景を畫いたものは割合に少くない、小供もさうである、事物の取捨や、全躰としての總合などが中々六ケしいので、素人には風景畫は一寸畫けぬ。個躰的の發達は系統的の發達を繰り返す、未開人の繪が、こんな點に迄小供の繪に似てゐるのは、面白い事實である。



第五圖

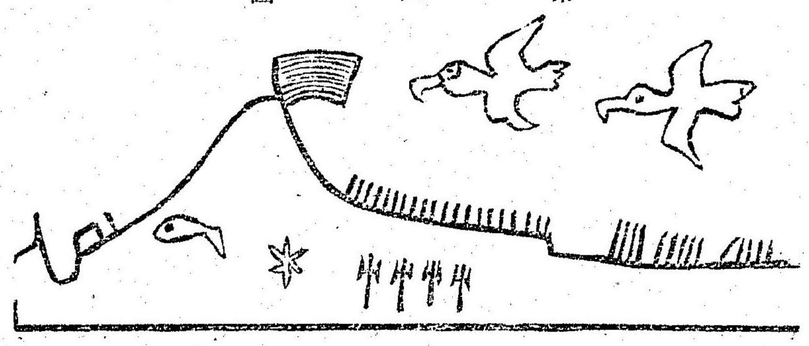
第六圖はトレス海峽にあるムレー島Murray Islandといふ島の繪である山の頂か

ら右の方向に妙な物の流れてゐるのは、此の島の火山島であることを現はしてゐる兩方の端にあるのは土人の家で、中央には芭蕉が澤山ある、其の一番大きい樹の近くにある目のやうなものは、實際ある地の裂口に一致して居るそーである、此繪は「ハッドン」の寫生したムレー島の繪に大躰似てはゐるが繪の樣子から見ると、土人等は此島を畏敬して、神樣のやうに思つて居る處から自然こんな繪を書いたのだらうといふとである。

海の蛇

海には大蛇が居て人を食うといふやうな話は昔から傳はつて、又恐ろしいことだから、甚く人の心の底に印象を與へ

第六圖

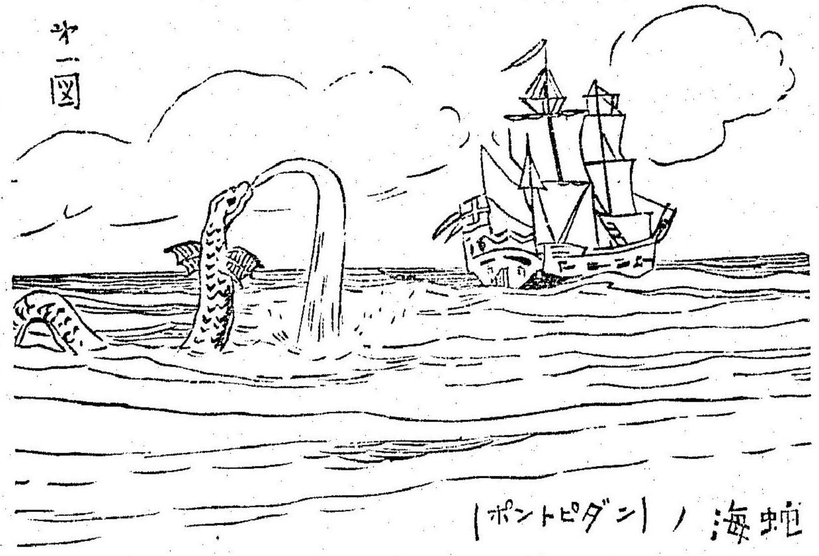


てゐる。

「アリストートル」や「プリニー」などが已に其の話をしてゐる、スカンヂナビヤの「オラウス、マグヌス」Olaüs Magnus (1529)「アルドロヴアン、プス」Aldrovan Pus (1640)「アダム、オバリス」Adam Obaris などいふ人は、多くの水夫等の話を集めていろ〳〵と想像を畫き、結句、此の蛇は、非常に大きい、恐ろしい動物で、船を驚かし、水夫などは一口に食つて了う物とした。

それよりはやゝ後れて、「アンス、エジウ

第七圖



蛇海ノ（ポントピダン）

ド」Hans Egedeは、千七百四十年に少しは確らしい話をした、「エジウド」がグリーンランドの近くで會つた海蛇といふのは、波の上へ躰を半分程扳き出して、口からは水を瀧のやうに吐いてゐた、毛が澤山生えて居て鰭が四對あつた、其の話によると、

この恐ろしい動物は非常に大膽で、船の頂邊よりもつと高く首を上げた、

といふことである、

海の蛇は、海豚が海を飛んでゐるやうに、さう始終人間の目に觸れるものではない、

「セーニュール」Seigneurは夫を説明して、それは此蛇が常に海の底の深い處に棲んでゐるからで、之は又神の智に依つて、人間の安全を保つ爲にそうしてあるのである、と、でも牧師が神の存在を説明する時のやうに、我儘な、無理なことを云つてゐる。

千八百四十八年に「デーダルス」Doedalus といふ船の船長の見たのは、白波の中を泳いでゐて、頭丈け見えた、然し、其の頭は寧ろいゝ格好をしてゐて、顎は鯨のやうで、鼻は平で、目の球は非常に大きかつたといふことである。

「オスボーヌ」Osborne といふ船で、「パールーリン」Pearson といふ人の見たのは、脊中の方から見たので、縦の鰭が二つに、も一つ脊中に鷄冠のやうなものがあつた。

今でもこんな蛇の居ることを信じてゐる者があると見えて、「ジョアンチー」Joannet といふ人の話に。

「ベイヤル」Bayard 號に乘つて居た十人の人は、その船から程遠からぬ所を、長さは十丈、巾(直徑)は一丈もあらうといふ二匹の大蛇の泳いでゐるのを見た、それは、「セミクジラ」でもなければ「マッコークジラ」でもない、又他の大きな魚でもない、どうしても海の蛇とより外はとれなかつた。

然も之は、所はサイゴンの近く、時は千八百九十八年二月の廿四日といふ、新しい時のことである。

「ポントピダン」の海蛇といふのは、長さが六十丈もある、此の蛇は千八百十九年、二十二年、及び千八百三十七年に、ノールウエーの海岸に現はれたといふとである、又「アンス、エジウド」によれば、此の蛇は、千七百三十四年に、グリーンランドの附近に現はれたそーである、又、千八百十五年、十七年、十九年、三十三年、六十九年には、ポストンの近くへやつて來たといふ話もある、「デーダルス」といふ船は、千八百四十一年に、太西洋の南の方で夫れを見、「ポーライン」Paulineと云ふバーク（小さい舟）は千八百七十五年に又夫れを見た。

斯ういふよーに、方々で又澤山な人に依つて、時々見られたといふのであるから、全然根據の無い事でもあるまい、何か大きい、異樣の物を見たに違ひない、又之によつて、當時如何に歐洲人の心を動かしたかといふことが想像される。

「オラウス」の云ふ處によると、有名な「ゾー、オルム」Sö-Ormといふのは、長さが二十丈で、太さが二丈もある、牛の子や、豚や、羊などを食ふ許りでなく、船にも惡戯をし、マストのよーにおつ立つて、時にはデッキから人間を浚つて行くともあるそーである。

いろ〳〵と事實が分るにつれ、化物であつた枯尾花の正躰も知れ、今、之れ等の怪物に就て與へられてある說明は、略下の如くである。

1、「ポーポイス」Porpoiseといふ「イルカ」の一種が澤山列をなして、飛び乍ら進んで行く處は、遠くから見ると、丁度大きな蛇が波間を蜿つて泳いでゐるよーに見える、第二圖の「ポントピダン」の蛇は、頗るよく此の說明と適合するよーに思はれる。

2、「アルヂス」教授Prof. Aldisの話によると、ある海鳥の飛ぶのも、蛇が水の表面を泳いでいるよーに見えるとがある。

3、大きな海藻やゴミの塊などは、恰度怪物が蟠つてゐるよーに見える、之等の塊は、幾度か海蛇だと思はれ、そつと近寄つて、鯨でも叩くよーに撲り付けら

れたことがある、何れこんな事は日中ではあるまいが、雨のそぼ降る夕、海鳥の聲も悲しく、風の音さへ哀れに悼ましく聞える頃など、舟を一つの心淋しい水夫等が目に、海藻の塊を蛇と見える位、無理もないとである。

「ユーゴー」の

Je distingue au milieu du gouffre où l'air sanglote,
Qudque chose d'infâme et de hideux qui flotte.

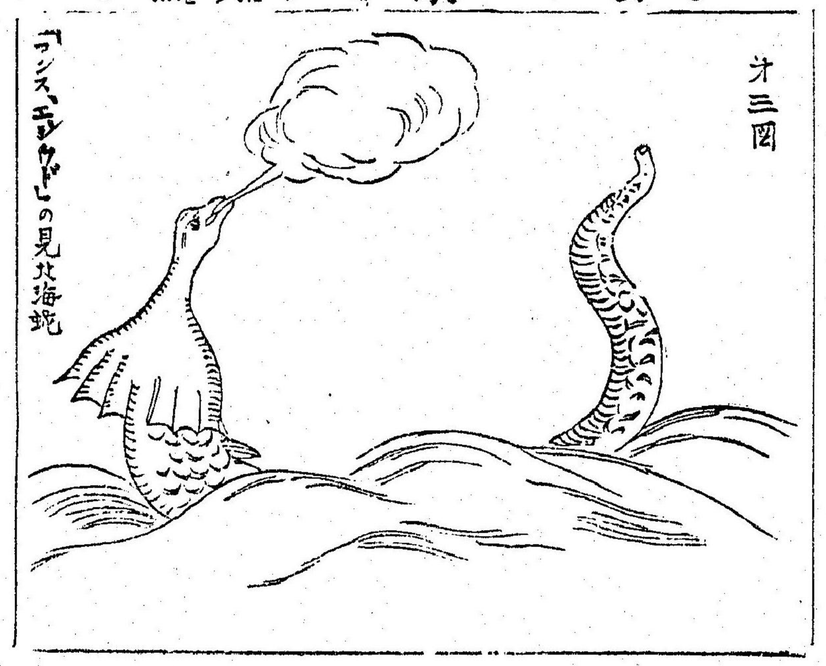
風かなしぶ、江のなかば
むくつけきもの、浮べる見ゆ。

など、入江といふと、山が海に迫つて水の面も暗く、一入凄愴の感を覺える。つい話が岐路に入つた。

4、「セラケ、マキシマ」といふ鮫の一種は、普通泳ぐのに對をなして、脊鰭と尻穗の上の方の部分とを水面上に現はして、並んで行く、一尾の長さが充分三丈位もあるから、二尾合せると六丈位にはなる、之が恰度蛇に似てゐる、有名な海蛇でストロンセー島 Stronsay Island（スコットランドの北にあるオークニー諸島中の一島）に打上げられたといふのは、恐らく此の種の「サメ」であらう、その脊椎

骨の一部分が、英國の「サージアン、ロヤル、カレッヂ」に保存されてあるが、「ホーム」や「オーウエン」など云ふ人は、夫れは確かに「セラケ、マキシマ」の骨であると云つてゐる。

5、「ヒモウオ」Deal-fish も、長くて（時には二丈位にも達する）蛇に似てゐる所から、海蛇の正體の一つであると「ウイルソン」Wilson は云つてゐるが、又「ギユンテル」Günther などは、此の魚の性質上そんなことはないと反對してゐる。



オ三図　「ランス、エルウッド」の見た海蛇

6、大きい「ヤリイカ」Kalmar は確かに、昔の北歐羅巴の海蛇や、「アメリカの海蛇」の原因に違ひない、「アメリカの海蛇」の話は、十九世紀の始めの頃、頻りにアメリカから傳はつて來たので、終に American seaserpent といふ綽名を得るに至つたのである、之れ等の海蛇の噺は、「ミッチェル」Mitchell の反抗に拘らず、見た人も多く、形狀も略一致してゐるので、頗る根據が堅い、其の形狀と曰ふのはいろ〳〵の人の話から、「ゴッス」の總合した處によると。

普通の蛇のやうな格好で、
長さは平均六丈、
頭は平で、目の話はない、ある人ははつきり目は無いとも云ふが、
頸の直徑は一丈二尺から一丈六尺位、頭や、頸や、脊中に、鯨のやうなものがある（鯨に就ては話が一樣でない）、
色は黑くて、下の方は少し薄い、

頭を前の方へ投げ出して、少し持ち上げて、水面を泳ぐ、

泳方は確かりしてゐて規則正い、

體は眞直だが曲げるとも出來る、

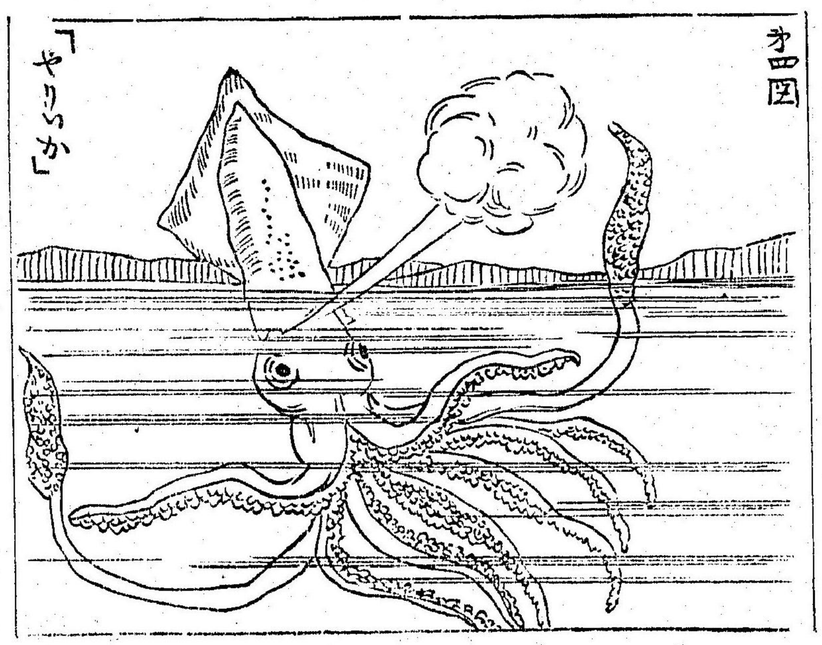
體からは水を吹く、

出てゐる體の部分は Nun-buoy といふ菱形のヴイ(浮標)のやうである。

此の「大イカ」はニューフアウンドランドの海岸に屢々居る、又スカンヂナビヤ、デンマーク、英國などの近くへも時々來る、大さは六丈以上のものもあつて、其の上、目の上の穴(水管)から

第四図

「やりいか」



水を強く吐き出して、夫れで體の進行を助けるから、泳ぐのがいくらか、ぎくしと、規則正しくなるに違ひない、「ビング」Bing の書いた「アンス、エジウド」の海蛇(第三圖)を見れば、直ぐに、此「ヤリイカ」を蛇と間違へたのだなといふことが點首かれる。

7、「デーダルス」の見た海蛇は、大方「アシカ」Sea-lion (或は "Anson's seal")であらうと、「オウーエン」は云つてゐるが、夫れは矢張り、前に述べた「イカ」だろうと云ふとである、「ムクワヘー」と云ふ人も、夫れは決して「アシカ」のよーなものではないと、後で否定してゐる。

8、一般に、已う全く湮滅したと信じられてゐる「プレシオソールス」Plesiosaurus や、其他海にゐる大きな爬虫類が、もう今迄少しでも殘つてゐる者があるとすれば、恰度此の海蛇のようなものである。

カリフオルニアの灣で、「フライ」といふ船の船長の「ホープ」Hope といふ人が、

第五圖　「プレシオソールス」

「ワニ」のような體で、頸の長い、鰭の四つある動物を見たといふ話があるが、「ニューマン」Newman、「ゴッス」Gosse などは、此の動物が則ち、「プレシオソールス」のようなものであるまいかと云つてゐる。然し、「プレシオソールス」が、今も

活きて海中に居るなどゝ云ふとは、誰も意外の事に思ふ、果して居るとすれば、夫れが海蛇の正體である處ではない、寧ろ海蛇そのものと云ふべきだ。

此の他猶ほ説明のしにくい海蛇談が澤山ある、その一例は、「ポーライン」といふ船が、南太西洋で見たといふ蛇である、此の蛇は、大きい「マッカウクジラ」を二卷まいて、やがて塔のように空中に衝き上り、どう〳〵鯨を一所に卷いて、海の底の方へ沈んで行つたと云ふことである。

「オスボーヌ」といふ船で「ヘーン」の見た動物といふのは、一度は、長さが三丈もある三角形の鰭の脊中が見え、兩方の鰭は水の上へ五六尺許り出てゐた、一度は、直徑が一間もある圓い大きな頭が見え、大きな鰭を龜のように動かしてゐたといふとである。「ウィルソン」は、此の蛇は「ヒモウオ」だと云つてゐる。

自分の鄕里は駿河灣に瀕した漁村であるが近くに一つの、小さいけれども、嶮しい高い島がある、つい八九年前のこと、此の島へ蛇が渡つて來たといふ噂が頻りにあつ

た、どういふ事が原因になつてこんな噂が傳はつたのが分らぬが、誰は何といふ岩の下にとぐろを卷いてゐたのを見た、誰はその藪の中に横はつてゐるのを見た、又誰は此間の夜、沖から波を分けて此の蛇の渡つて來るのを船で見た、大方辨天樣の蛇であろう、(此の島の頂上には、田舍にしては小奇麗な、辨財天の祠がある、島は奇岩怪石に富んで、春は櫻も咲く、頂上の眺など頗るいゝ)、殺すと罰が當る、などゝ枝に花を咲かせて、雲を摑むような話が至る處にあつた、こんな話は暫らくの間傳はつてゐたが、いつ消えるとなく消え失せて了つた、事實は恐らく無根であつたろうが、何かの間違から話が始まり、自然民族のような單純な、何かと云へば鰯の頭も神樣にしよーといふ、不思議好きな村民の心から、いろ〳〵と想像を逞しうして、遂に此に至つたのであろーと思はれる。

海蛇ではないが、陸の蛇には非常に大きいのがある、「イサビー」の蛇 Serpent d'Isabit といふのは、頭がピー、ヂユ、ミヂ、ズ、ビゴル Pic du Midi de Bigorre (ピレエース山脈中の一峯、佛蘭西にあるもの)の頂上にあつて、體は、サン、ソービユール、リユー、ケードル等の谷に一ぱいになり、猶尾は、ガバーニーユといふ原に卷いてゐたといふとである、此蛇は三月に一度食物を取るので其の時は非常に大きな氣息をして、凡て其の近くにゐる動物を胃の中に吸ひ込む、此蛇はこー〳〵大きな松火で殺された、睡つてゐるよーな不活潑になつてゐるのを覺すと、怒つて、例の大きな氣息をする拍子に、松火をも呑み込んで、大悶えに悶えて、終に死んで了つたといふとである。

かはせみ

「かはせみ」Alcedo ispida にはいろ〳〵の名がある、Eisvogel, Uferspecht, Wasserspecht Seespecht, Königsfischer, Martinsvogel 等隨分と名の澤山ある鳥である。

「かはせみ」は三月の末頃巢を作る、その巢に就ては「ベヒシユタイン」Bechstein と

いふ人の話がある。

「かはせみ」の巣を作る處は。常に、乾いた草のない、嶮しい川の縁である、そこへは鼠や「べれつと」や、又他の動物も中々行くとは能ない、岸の一番高い處から三十か六十センチメートル位下つた處へ直徑が五或は六センチメートル、深さが一メートル位の圓い穴を堀る、此の穴は少し上の方を向いて、道が曲つてゐる、一番の奥は少し大きく、高さが六か八センチメートル横幅が十一か十四センチメートル位ある圓い玉のやうな洞穴になつてゐる。

此の洞穴の下の方には、魚の骨などを敷いて、大變乾いてゐる、上の方の壁は滑かになつてゐる此の骨の上には六つか七つの、大きい、圓い、白く光つた卵子がある、卵子は、產み立の時は黄色い、之は中の黄身が半透明の卵殼を透して見えるからである、卵子の大さは殆んど「うづら」Caille のに近い、自分は、どうして羽の硬い、短い「かはせみ」が、この卵子を皆んな一度に、暖め得るかと云ふとは

しらない。

「かはせみ」は巣を作り上るのに、二週間か或は三週間位かゝる、若し途中に石などがあると、夫を堀り出さうとかゝるがそれが能さないと、其の儘にして、今度は迂回して傍の方から堀つて行く、若し餘り石が澤山あれば、そこはやめにして別の穴を堀り始める。

何もその平安を妨げるものが無ければ、「かはせみ」は同じ穴を、何年も〳〵も棲んでゐる、然し、若し穴の道が廣がつて來ると、もう決して其の中へは卵子を產まない。

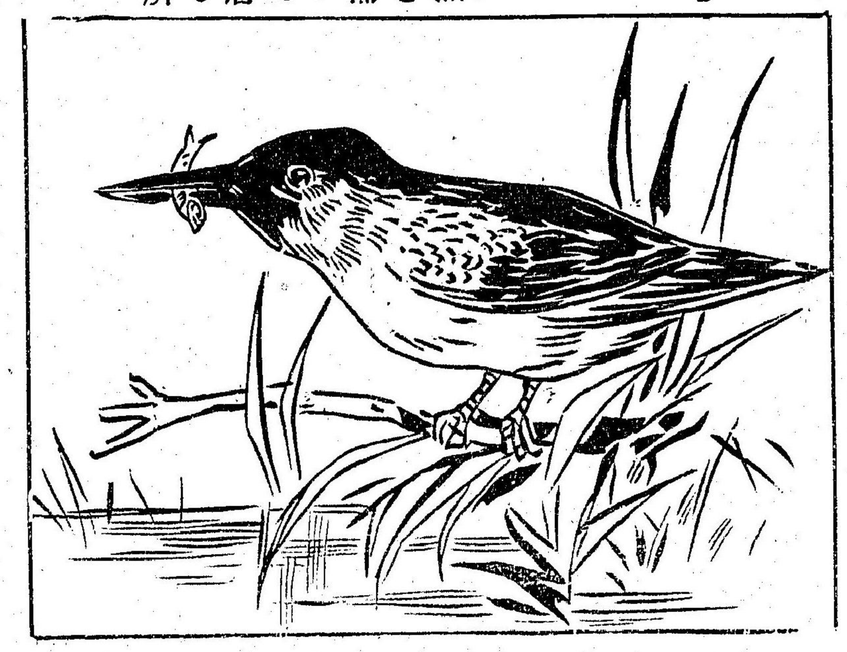
穴の中には、魚の骨に混じて、「とんぼ」の頭や羽が澤山あるから、それで其の巣には已に「かはせみ」が棲んで居たなといふとが分る、巣がまだ新しい時には、魚の骨もごく少くない、又「とんぼ」の頭などは、子供が卵子から孵つた後でなければない。

一寸見た處「かはせみ」の巣は鼠の穴など、見分がつかぬ、それで其の中に「かはせみ」がゐるかどうかと云ふとは、穴の口で一寸臭をかいで見れば直ぐ分る、若し魚の生腥い臭がしたら、それは「かはせみ」の巣であるといふとが分る。

卵を暖めてゐる時は、外を叩いた位では中々逃げない、穴を掘つて手で摑まれさうになる迄は動かない。

自分は五月の中程から六月の初にかけて卵を見た、雄は巣から百歩或は

「カハセミ」が魚を捕つて居る所



三百歩位の處にゐた、夜もそこで過し、晝の或部分もその邊で過ごす。

「かはせみ」は、歐洲にはどこにでも居る、アジアの北方及び印度の方にも居る、普通、緣に森のある、水の澄んだ川などに居る、アルプ山では、海面上千八百メイトルも高い處まで棲んでゐるといふとである。

流れが速い爲に水の凍らない處では冬でも止つてゐるが、そうでない都合の惡い處では、冬はギリシヤか、アフリカの北東の方へと移つて行く。

常に淋しい所に居るがすきで、小い魚や、蝦などを捕つて食ふ、非常に大食をする。

卵子を產んでから十四日か十六日位で、小供になる。

まだ小供の時分に捕へて飼ふと直き馴れるが、大きくなつたのは中々なれない。

「かはせみ」に就ては、昔はいろ〳〵の話があつた、

「かはせみ」は魚の骨で水の上へ巣を拵へる、夫には一つの戸があつて、是は「かはせみ」より外に誰も開けるとができぬ、十二月の「ハルキオーネの日」Halkyo—

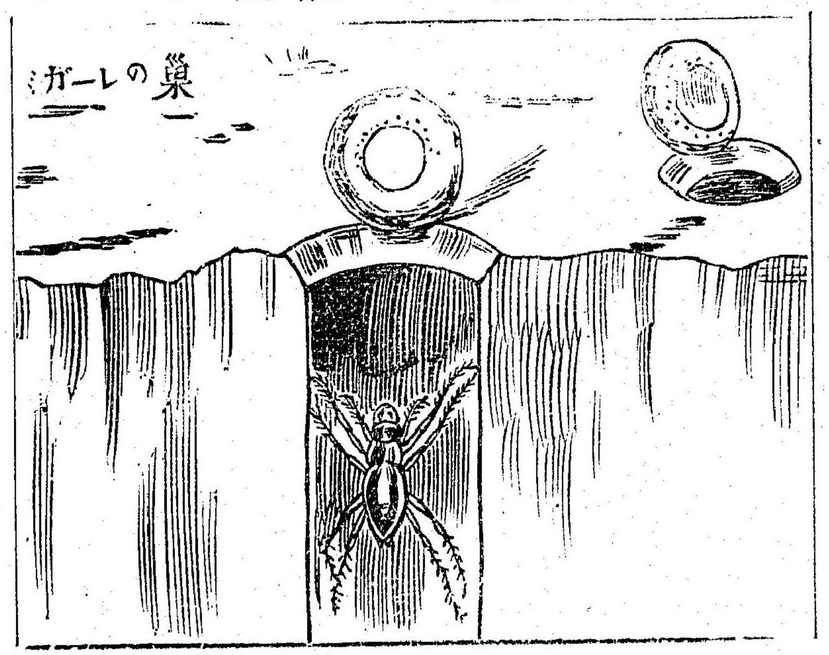
nische Tage（之は冬至の前後十四日を云ふので此の間は海か「かはせみ」等の産卵を守る爲に、風も吹かず、靜かな凪になると云ふ）と云ふい、日に卵子を産む。雌は非常に雄を愛して、年を取つてからは始終傍にゐて、死ぬ迄餌などをくれ、いよいよ雄が死んで了うと、悲しい聲を出して歌をうたひ、自分も一所にそこで死ぬ。死んだ「かはせみ」は雷除になる、家内を平安にさせる、海の風を靜かにする、又コンパスの用にも足りる。

「ハルキオーヲ」Halkyone 或は「アルチオーヲ」Alcyone（ギリシャの神話）「エオロス」：Aolosと「エギアーレ」：Agiale の娘で、「カイックス」Keyxの妻である、ある時船が難破して、「カイックス」が溺死したので、「ハルキオーヲ」は悲痛の餘り、之も海に身を投げて死んで了つた、そこで二人は又會合し、「かはせみ」Halkyoneu として長へに活き、長へに相愛することが出來た、大神「ツオイス」Zeusは夫れを哀れと思つてか、その十二月の産卵期には凡ての風が吹くを止めて、彼等の心を靜めてやる「かはせみ」に似た鳥で「セリーユ、ピー」Cerylepie といふのは矢張り「かはせみ」のやうな巣を作る只之は「かはせみ」とは違つて、群生して巣を作る、「トリストマン」Tristmanといふ人の見た巣は、ゲヂザレー湖Lac de Génézareth（パレスタインにある湖水）の内の、ムーダツラといふ小さい川の川口にあつた、どの巣の入口も水より高いこと十センチメートル以上のものはなかつた、そこへ行くには泳いで行かなければならない、穴の奥は矢張り小し大きくなつてゐて、そこには細かい草が、恰度絨氈のやうに敷きつめてあつたと云ふことである。

とりとりぐも

蜘蛛には地の中へ巣を造るものが大分ある殊に「とりとりくも」といふのは、蓋のある面白い巣を作る、以下は「コミール、ブランシャル」Émile Blanchard といふ人の話である。

歐洲の南部には「とりとりぐも」Mygaleがゐる、ギユイアーやブラジルなどにゐる大きいものに比較すると餘程小いが、それでも中々面白い、之等の蜘蛛は他のものゝよーに危ない處へは巣を作らない皆悄怜く、てんでに心地のいゝ巣を拵へる。殊にコルシカ島にゐるもの（pionoière 工兵ぐも）に就て話そー、此の蜘蛛は赤い土の中へ、圓柱形の、深い井戸を掘る、井戸は、上の方が少し開いて中は、自由に「くも」が上つたり下つたりするとができる、こ



んな深い井戸を、一粒づゝ土を搬んでは掘る蜘蛛の忍耐は、どんなであるか云はずとも分る、「くも」は穴を掘り乍ら、絹糸のよーな細い糸で其の壁を固める、然し「くも」は、決して裸の壁では満足しない、天鵞絨よりも軟かい、きれいな糸の幕でもつて、中を包んで了う。

家がすつかり出來ると、戸が必要になる、さー此の戸が、驚くべき、眞に人間の賞讃を値するものである、戸は蓋のよーなもので、蜘蛛の巣で固められた土で出來てゐる、圓くて、厚くて、上の方が大きくなつてゐる、之れで口の大きい穴に、ぴつたりと嵌まる、戸の外の面は、附近の土と見分られるよーに粗くなつてゐるが内面は之に反して、穴の壁を被つてあるよーな軟かいもので被つてある。

戸には又蝶番がある、蝶番は厚い、彈力のある糸で出來てゐる、其の反對の側には詰がある、つめは戸の下面の椽を取巻いて並んでゐる小い穴である。

此の「くも」は穴の中に潜つてゐて、何か自分の家の方へ近いて來る者があるよう

な氣合がすると、いきなり戸口の處へ走つて行つて、脚の尖にある鉤をつめの穴に入れ、身を穴の壁にへばりつけて、一生懸命、戸を開けられまいと用心する。夜、外へ餌など探しに行く時には、下から戸を押上げて出る、出て了うと戸は自然に締る、歸つて來た時には、例の鉤で一寸戸を引き上げて中へ辷りこむ。

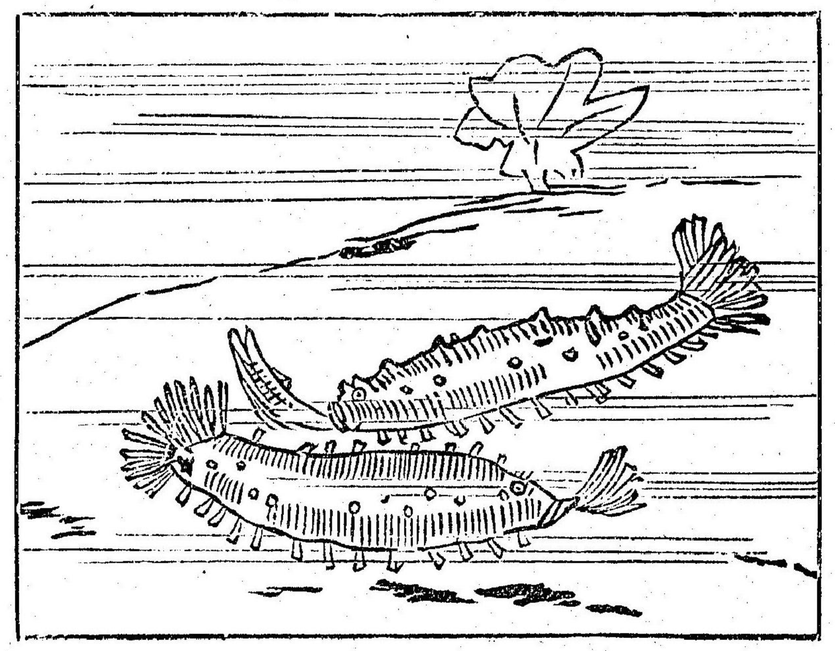
このくもは孤獨の生活をするものであるが、往々蓋を並べて住んでゐる。

「なまこ」の中にゐる魚

春、海へ行くと、水面近く、方々に、青い「クラゲ」が泳いでゐる、頭の傘は大きくて厚い剃り立ての坊主の頭のやうだから、方言「入道クラゲ」といふ、波によせられて來るのか汀近く、水の少しかない岩の凹などに、脚や傘の端を、ひら〳〵しながら居るともある、泳ぐ時には頭を少し前に傾けて、水面と角度をなして泳ぐ、春は多く海が穩かである、水も澄んで、青いガラスでも布きつめたやうである、少し

小高い處へ登つて見ると方々に例の「入道クラゲ」が點綴して、廣い、深い、靜かな海の中を、我物顔に泳ぎ廻つてゐるのが、手に取るやうに鮮かに見へる此の「クラゲ」にはよく、小さな魚の附從いてゐることがある、小魚共は無論、「クラゲ」の大きな傘の下に、その隱れ家を見出そうといふ爲に從いて來るのであらうが、時には「クラゲ」の脚が鼠にでも食はれたやうに傷けられてゐる所から見ると、小魚は、吾が爲に避難の檐を與へてくれる寄主の身をも

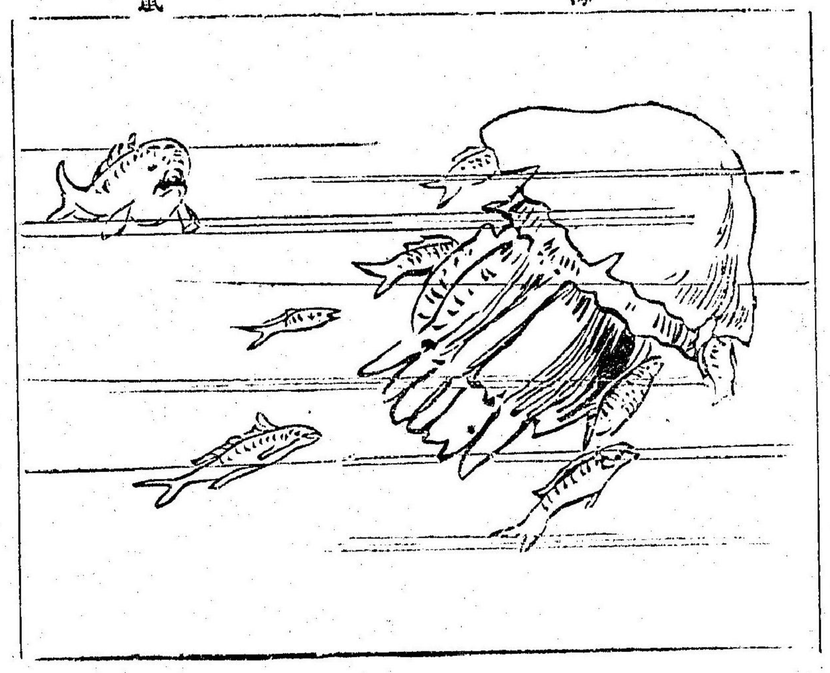
海　鼠



「なまこ」の中にゐる魚

饑餓に迫つては襲ふと思はれる、女子と共に小魚も度し難いものである。

魚で寄生するものは此の他いろ〳〵あるが特に面白いのは、「ナマコ」の一種海鼠の腸の中に潜る「フヒエラスフエー」といふ魚であるこの「ナマコ」を開いて見ると、腸の終りの部分に恰度樹の枝のやうな、樹狀器 Organess arborescents といふ妙な機關あるが、此の中に、一尾か、二尾か、三尾か、或は四尾の、小さい、尾の鎗のやうに尖つた、「フヒエラスフエー」Fierasfer といふ魚が

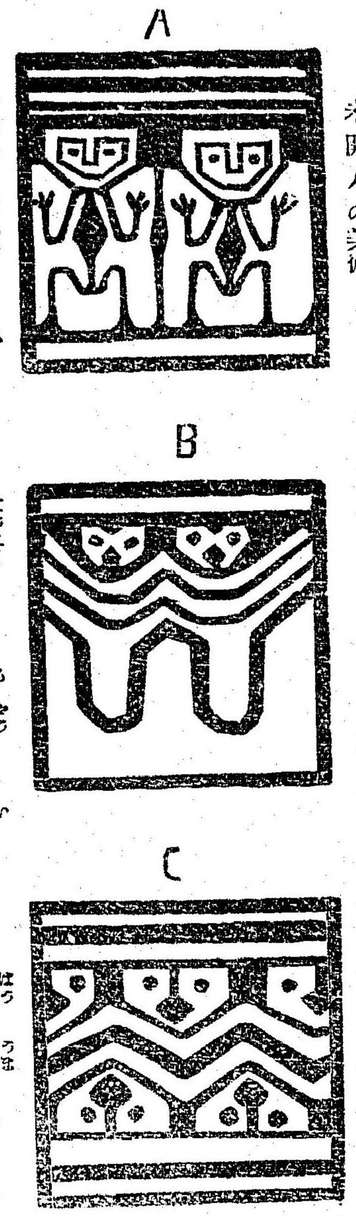


ゐる。此の魚は、そこへ入る爲に「ナマコ」の後部の開くのを待つてゐる、開くといきなり尻からだん〳〵と中へ入つて行く「ナマコ」が口を塞ぐと、そこで摑まへられたやうになるが、又開くのを待つて、とう〳〵すつかり體の隱れる迄潜り込む。腸の中で何をしてゐるかは、はつきり分らぬが、「ナマコ」は此の魚が中に居てもそれ程邪魔にならぬらしい、恐らく此の魚は時々散歩に出掛けて餌を拾ひ、「ヨナ」Jonas が鯨の胃の内でしたやうに、又「ナマコ」の腸の中へ返つて來て、そこで安全に食物を消化するのであらう。

未開人の美術

第一圖のA、B、Cはサロモン諸島 Salomoninseln（ソロモン諸島とも云ひ、東經百六十度南緯十度邊、ニューギニアの東方に斜に横はつてゐる群島である）から得た鎗の裝飾摸樣である。

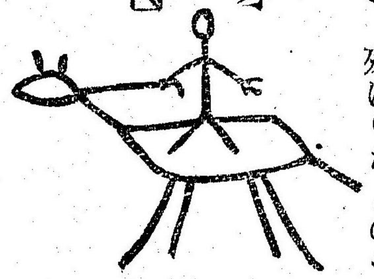
第一圖



一般に未開人の美術は、繪などより彫刻とか、摸樣とか云ふものゝ方が旨いやうに思はれる、第一圖などは、圖案としても中々捨てたものではない、殊にCなどのやうに、同じ顔の摸樣を上下轉倒して、相對せしめたる處など、小供には一寸眞似が出來かねる。

第二圖は「アビアカ」人の腕の文身してあつた繪で、人間が馬に乘つてゐる所である之れは殆んど、小供の畫く繪と變らない、馬の脚に長短のあるのはやゝ面白い、馬の顔の下方の線

第二圖

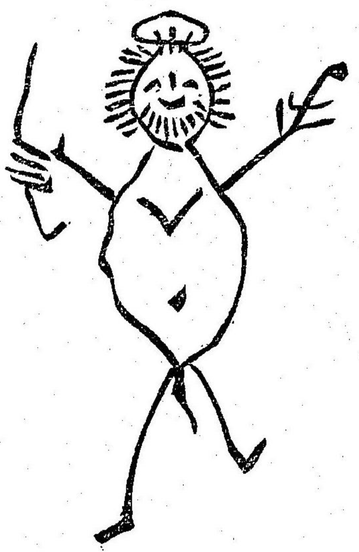


を直ちに手綱に遷らせたのは奇拔である。

「アビアカ」人Apiacasと云ふのは、南米プラジルの、タバジョス河Rio Tapajos畔に住んでゐる人種である。

第三圖は「シュタイチン」W. v. d. Steinenの第二の探險の寫生帖にあるもので、「ボロラ」人Bororaの畫いた「シュタイチン」の肖像である、頭の上の圓いものは、恐らく帽子であらう、髭や頭髮の逢々としてゐるのは、恐らく、異境の地の長い間の彷徨に、緩々剃刀を當てる暇も無かつた爲でもあらうか？、「ボロラ」人は、南米のパラグアイParaguay河及びパラナParana河の間に、狩などをしてゐる人間である。この外にまだ面白いのがありますが畧しておきます。

第三圖



動物の壽命

動物の壽命に關しては、比較的事實がよく知られてゐない、ある滴虫類「Infusoria」は始めから終りまで、注意して觀察されたが、四十八時間以上は活きてゐなかつた「サー、ジョン、ダリエル」Sir J. Dalyellの「イソギンチャク」Actni mesembryanthemum は七十年以上も活きてゐた、昔しローマの帝室飼魚池の中にゐた「ウミヤツメウナギ」「ampnete.」は六十年活きたといふとである、コヒは百五十年、「カメ」も「ギユンテル」Güntherの談によると百五十年位活きてうるそうである、印度の土人は「ワニ」は少くとも百年いきると云つてゐる、千四百九十七年に南方獨逸のスワピアで取れたある喉鰾魚類のEsox lucius は、長さが一丈九尺、重さが三百五十ポンドあつて、

"Iam the fish which was first of all put into the lake by the hands of the Governor of the Universe,
Frederick the Second.
the 8th Oct. 1230."

『我こそは、千二百三十年十月五日宇宙の主權者「フレデリック」二世の手によつて、最初に此の湖に投ぜられたる魚なり』

と書いた指環をつけてゐたといふとである「我輩は猫である」と云つたように、大變に威張つた魚である、誰かの惡戯か何か知らぬが、指環の年號から押すと、此魚は少くとも二百六十七年以上活きて居たとになる。

昆虫の壽命は通常短い、近頃の人からは肯定されないが、「アリストートル」の話によると、蜂の女王は七年活きる、「ラボック」の飼つてゐた蟻の女王は、十五年間生活して居つたそうである、「カグラウ」Maifliege の命は、たつた一日しか續かないといふので有名である、然し一日と云ふのは、成虫になつてからの壽命で、幼虫の

時はや〻長く、數週間續く、成虫になつてから何故そう速く死ぬかと云ふに、「カゲラウ」は全く自衛の力に欠けてゐるのみならず、體の形狀、いろ〳〵の習性等から目につき易く、又魚や鳥に非常に好かれてゐるから、速く卵子を產まないで、少しでもぐづ〳〵してゐれば、種の繼續を維持するとが六ケしい、生殖作用と云ふのは生物にとつては非常なる大事で、其の時期には生活力の Vitality 最上級に達すると同時に、又エナージーの最大量を消費するものであるだから、下等な動物では、速く身體の未熟期に達し、急いで生殖作用を濟ませて、程なく死滅するといふよーなものがあるのである。

「ワシ」、「カラス」などの壽命は百年、「アフム」は飼つてゐても、六十年位活きてゐたのがあるそーである、「クジャク」は二十年、小い鳥は割合に短命で、「ツグミ」「カナリヤ」等が二十年、多くは五年、或は六年で死んで了う。

哺乳類の中では、大きい丈に象が一番長壽で百年、「ラクダ」は平均して五十年だが八十位になるのもある、馬は四十、鹿は三十、牛は十五から二十、犬、豚も十五から二十、羊、狐、兎等は僅かに、七年から十年位のものである。

前云つたよーに、生殖機能は身體と其の成熟期の一致するものであるが、平均その成熟期といふのは、生物の壽命の略五分の一位の時に當る、即ち、人間や象では先づ二十年、馬、驢馬、牛などでは三才か四才、羊は二才、「テンジクチヅミ」Meerschweinchen（壽命は四年か五年）は一年の内に成熟する、然し、猫は壽命が二十年もあるのに、生れて一年の終りには已に成熟期に達する人間の壽命も昔は長かつたと云ふが、「マーガレット、パッテン」Margaret Patten といふ人は百三十七、「ジョンロビン」John Rovin は百七十二、「ピーター、トートン」Peter Torton は百八十五で死んだといふとである。

「ケンドリック」は此の齡は誇大に違ひないと云つてゐるが、百三十七才位活き延びる人はありそーに思はれる。

潮姫

春の海程心地のいゝものはない、どろ〳〵太鼓の音が聞える、見れば沖を遊山舟が通る、遠くて人數は分らぬが、時々赤い色の日に光るのは女であらー、賑やかな笑聲が、唾いよーな海面を這ふてこゝ迄といく。

汐はよく干た、見るかぎり干潟で、目なれぬ磯の面目いと、乘り棄てた汐干の舟が汀に横はつて、方々に小供や女が遊んでゐる。花曇りとは云へ流石に春で、日は嬉しそーに砂の上にきらめいてゐる、砂を蹈めば、あたりに陽炎がもえて、足の裏が心地のいゝ程ひえ〳〵と冷たい。

岩の凹んだ處へ、波においてきぼりにされた水が溜つて、小さい池が出來てゐる、蝦の子もゐる、長い髭をぴんと張つて、鳶が空もで舞つてゐるよーに、威張つて水の中を泳いでゐる、不意に、稻妻のよーに閃くものがある、一方の穴から一方の穴へと飛んだ、小さい、赤い、きれいな魚である、やがて穴から、圓い頭と、二つのルビーのよーに光つた目が出て來て、吾々の平安を破る人間といふものは、恐ろしい、醜い、顏付をしてゐるものだな、と云ひそーな風をして、上の方を見てゐる。

海の上を黃色い蝶がとんでゐる、麗かな春の日にあこがれて、花に倦きた小時を、霞こめた海原遠く、潮姫と春を舞はん、といふのか、風がそよ〳〵吹いて、生暖い物の香が流れてくる、どこから散つて來たか、微白い櫻の花が一片、前に居る子の髮を掠めて、池の上に落ちた、水の上へ出來た細かい波の輪の影が、梨地のよーに光つた底の砂へ、ちら〳〵と振へながら映る。

汀の處へ行くと、波がちよろ〳〵驅けて來て、嬉しいよーに砂をキッスしてゐる、波の引いた後は、水に濡れた砂に日がさして、眩しい程光る。

Linger, where the pebble-paven shore,
Under the quick, faint kisses of the Sea,

Trembles and sparkles as with ecstasy.

Shelley.

春の海は静かだから、底がよく見える、舟に乗つて磯近い所を行くと、背中に銀のよーに光つた星のある魚、絵の具を塗つたよーに眞青な魚、燃え立つ程赤い、飛白のよーな班のある魚、絲のよーな魚、箱のよーな魚、葛餅のよーな魚、いろ〳〵な魚が、さも樂しそうに水の中に泳いでゐる、石の上に、じつとしてゐるもあれば、藻の中に陰れてゐるのもある、又途中にぶらついてゐるのもある。

上の方で何か聲がする、仰向くと、殆んど目も達かぬほどの高い處を、雁のよーな鳥が鳴きながら、静かに飛んで行く、時々星のよーにちら〳〵するのは、動かす翼が日に映じて輝くのであらー、能る丈跡をつけて見てゐると、鳥はいつか青い色と一つになつて、大空の中にかすれて、消えて了つた。

軟かい風に帆を上げると、舟は蜻蛉のよーに、青い海の上を、輕く辷つてゆく、舳に小さい波が碎けて、細かいシャボン玉のよーな泡が顔にかゝる、山も霞んでゐる海も霞んでゐる、空も霞んでゐる、皆薄紫にかすんでゐる、舟は走る、我が血は空氣よりも清い、行手はいづこであらー？

We left behind the painted buoy
That tosses at the harbour-mouth;
And madly danced our hearts with joy.
As fast we fleeted to the South:
How fresh was every sight and sound
On open main or winding shore!
We knew the merry world was round
And we might sail for ever more.

Tennyson.

蜥蜴

「トカゲ」には普通脚が四本あるが、二本のもあれば、時には全く外形上脚はなく、只その跟跡が皮膚の中に止まつてゐるものもある「トカゲ」はどこへ行つてもよく居る爬虫類で、その生存地域は中々廣いが、北は北緯六十度以北、南はパタゴニアの南端以南にはもう居ない、無論熱帶地方が一番多いので、Monitor, Leguan など云ふ最もよく發達したものは、熱帶地方に限られてゐる「トカゲ」は蛇程人に嫌はれない、體が小くて、いくらか可愛らしい處がある、夏の暑い日など、草から出て、石の上を走る速さ鱗が青く光つて、風も死んだ日盛りには、こんな物でも冷しく見える。

多くの者は地の上、岩の上などにゐるが「樹の上にゐるのもある、又「モニトル」のよーに水の近くに棲んでゐるものもある、沙漠にゐるのもある、海の中へは決して

入らないが、只中央アメリカの南方太平洋中にあるガラパゴス島Galapagos Islandsに居る「レグアン」丈けは例外で、之は海の中に入り、海藻を食つてゐるといふとである、又「ヤモリ」Geckonen のよーに、晝間は蔭れてゐて、夜になると出て來るといふノクターナルものもある。

多くの「トカゲ」では、尾の部分の筋肉や脊椎骨の接合が弱いから、尾に少し打撃でも受けると直ぐ切れて了う、切れた尾は、暫らくの間は、恰度それが一つの動物であるかの如く、蚯蚓のように暴れてゐる、之は小供のよく知つてゐるとで、自分の郷里の方では、「トカゲ」(方言では「カゞミッチョ」といふ、どう云ふ意味から來たのか分らぬが、面白い名である)の尻穗を切ると善い物を拾ふ、といふ欲の深い迷信(迷信と云つてはちと強すぎる、小供の迷信といふのはそれ程罪のあるものではない)があつて、學校へ通ふ途中、そこらの墓場や道の側などにある「トカゲ」を窘めて、尾の切れてころ〳〵轉るのを面白がつたものである。

「トカゲ」は尾を切られても平氣でゐる、其の上、失つた尾は其の後程よく出來る、然し筋肉と皮膚は全く再生するが、椎骨の部分は軟骨で、再び前のような骨質のものにはならない、此のように「トカゲ」の尾の切れ易いのは、全く消極的の自衛策に外ならぬので、後から敵に追はれて、尾を捕へられても、全體の生命に危難を及ぼさぬ爲である、甚だしいのは（「やもり」の一種）、敵に追はれると、自然に尾の一部分が切れるびく〳〵してゐるから、敵は夫れを餌と思つて捕へてゐる間を一目散に逃げ延びるといふものもあるそうである。

「トカゲ」の卵子は玉子狀で、石灰質の革のような硬い皮がある、數は爬虫類では少ない方で、四十位が一番多い、「ヤモリ」、「アノリス」などでは一つか二つしか產まないが、是等は恐らく度々產卵するのであろう親はちつとも小供の世話をせず、產んだ處へ置きざりにして、そこで自然に孵化せる然しある種類では、卵子は輸卵管の中へ蓄へて置いて、小供になつてから產む Ovoviviparous ものもある。

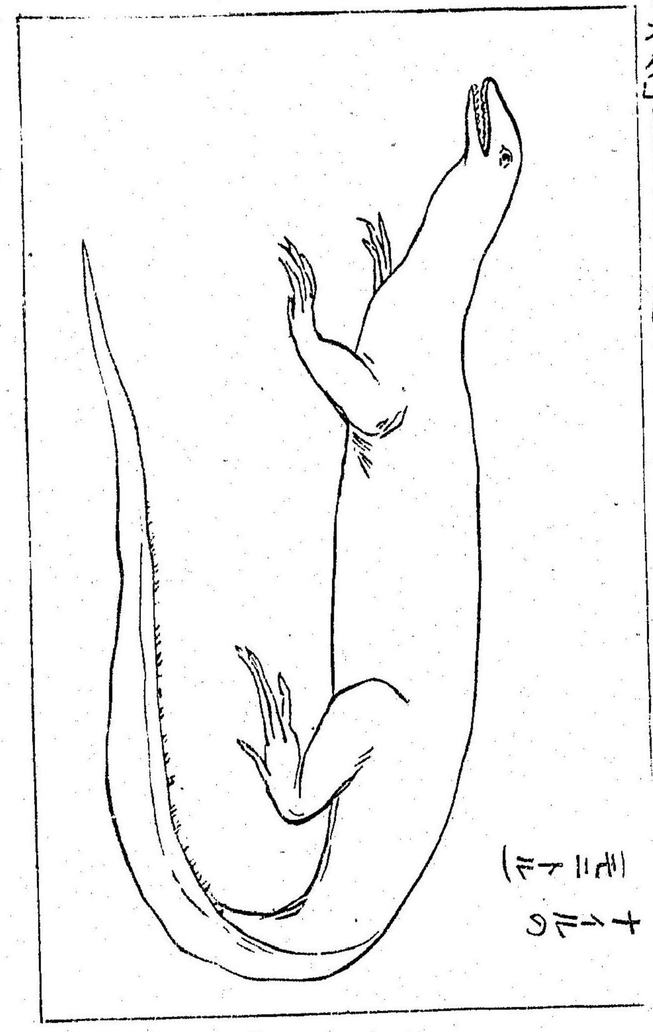
「トカゲ」は毒だと云つて怖がる者もあるが中央アメリカ、及び北アメリカの亞熱帶地方にゐる「ヘロデルマ」Heloderma といふ種類より外に、毒のあるものは殆んどない。

「モニトリデー」Monitoridae といふ科に屬するものは非常に大きくて、六尺以上に達するものもある、あるものは陸生、他は半水生である、半水生のものは尾が平たくなつて泳ぐに適し、上の方には、鋭い鋸のようなぎざ〳〵があつて、之は恐ろしい武器である、迂つかり觸ると非常な怪我をする、アフリカ全體、印度、オーストラリアなどに居て、小さな哺乳動物、鳥、蛙、魚他の動物の卵子などを食つてゐる。

「ナイルのモニトル」Monitor of the Nile といふのは、熱帶地方のアフリカの大きな川の近くにはどこにも居る、アラビア人は之を「ワラン」Waran と云つてゐる、古のエヂプトの彫刻や形象文字にも往々此の「モニトル」は現はれてゐる、此の中の或る

者は「ワニ」の卵子を食ふといふので、昔も今も、大變に尊敬されて居るといふとである。

「スナトカゲ」Sand-Lizardは、イングランドの南方に僅かに居る「トカゲ」であるが



（ヨハ ムーミ）
ナ ヘ ミ の

此の「トカゲ」の居る處には又不思議に、「コロ子ヲ、レービス」といふ蛇がある、兩方共歐州大陸の方に多き動物で、此の蛇は多く「スナトカゲ」を食ている、そこで、「トカゲ」がイングラントに逃げて來るにつれて、蛇もだう云ふ方法でかブリッチッン海峽を渡つて、その後を追ふて來たのだといふとである。

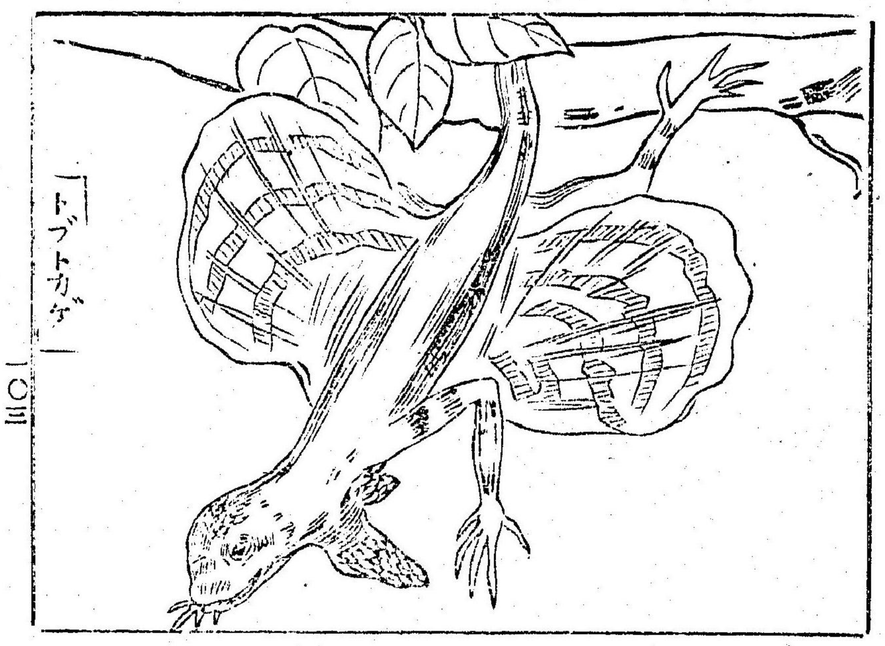
メキシコにゐる「ヘロデルマ」は、非常に毒があるといふのでその地方では恐れられてゐる、「ステーン」J. Steinと云ふ人は指を咬まれたが、恰度毒蛇に咬まれたと同じ樣な徵候を現はしたと云つてゐる、此の「トカゲ」は體一面に、汚い黄が、つた褐色の粒々が出來てゐるから、恰度レプラに罹つた人の皮膚のよーに見へる、始め此の「トカゲ」に毒がゐると土人の云つてゐるのは、その樣子の醜い爲にそー誤信してゐるのだろーといふとであつたが、「ステーン」の實見で、その誤信でないと云ふとが分る。

「トプトカゲ」（Draco飛龍）は、多く東印度の諸島に居るが、只セイロンには居ない

圖にあるやうに、後の方の肋骨が五本か六本非常に延びて、其の間に廣い皮が付いて、翼のよーなものが出來て居る、脊推動物の中で、肋骨を運動（體を前方に押し進むる運動locomotion）の目的に使用するのは蛇丈けだが、此の「トカゲ」も亦その異例の中にはいつてゐる、然し、蛇の運動は全く肋骨によるに反し、この「トカゲ」では只肋骨の一部分が翼になつた許りで、其の上翼を切り去つたとて歩行の運動には夫れ程差支へない（脚を切つて翼丈にすると、全然動けないで靜として居る）。

飛龍は、アメリカの熱帶地方にのみゐる「アノリス」Anolisに似た舊世界の「トカゲ」であつて、「アノリス」のよーに、咽喉の處へぶら下つた美しい皮の突起がある、之は雄にも雌にもあるが、殊に成熟した雄のがよく發達してゐる、之は全く裝飾で、中に内腔があるのでも何でもない、「アノリス」のは非常に美しく光つてゐて、少しでも怒らせると直ぐにそれを擴げる、一般にこの突起を持つてゐる「トカゲ」は、性質が激烈である。

「カントル」Cantor と云ふ人は、飛龍の美しさは非常なものである、と云つてゐる、飛龍は常に樹上に生活してゐる「トカゲ」であるが、その樹の枝に蹲踞つてゐる時には、遠くから見ると、色が褐色と灰色の混じたよーな色で、一寸見た處では樹の皮と區別がつかぬ、靜としてゐる時には、只虫を狙つてゐる目玉があちこちと動く許りで、其の外に、其處に生きた物が居るといふ印は些つとも見えない、虫が近くへ來ると、不意に翼を廣げて飛んで行つて捕へる。



「トブトカゲ」

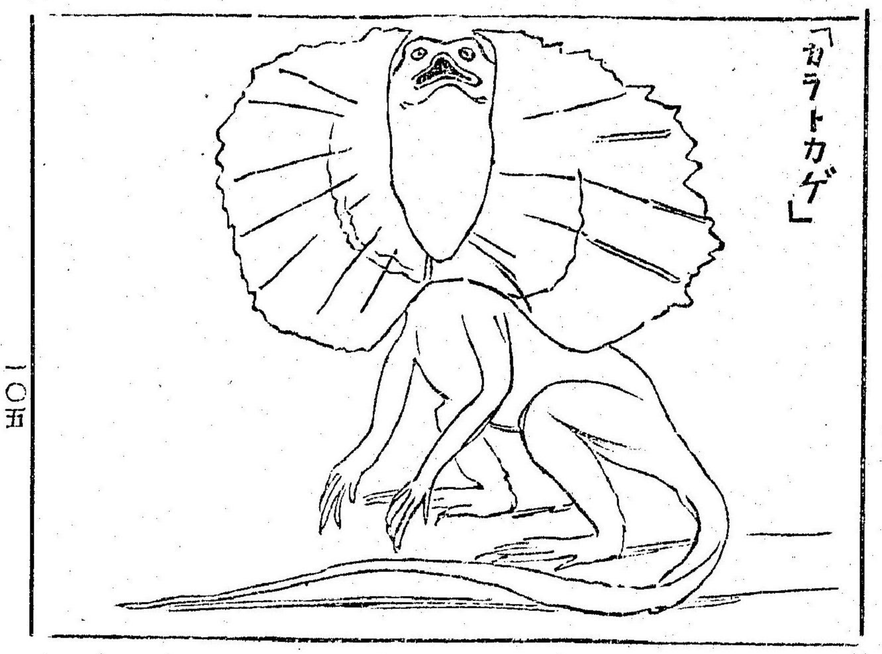
大さは大概七八寸で、尾は非常に細長く、殆んど體の半分以上である、卵子は一度に二つか四つ位樹の穴の中へ産む、

「カラトカゲ」Chlamydosaurus は、クインスランドにゐる「トカゲ」で、長さは、長い細い尾を入れて二尺位ある、此の「トカゲ」は頸の廻りにフリル（袖口などにつける劈襞のよーなもの）のよーに疊まる皮があつて其れを擴げると、恰度「エリザベス」女王時代の大きいレースカラに似た、巾の廣いカラになる、「クレフト」といふ人の話によると、此の「トカゲ」を驚かすと、前肢を擧げて後肢で立つて、恰度「カンガルー」のよーに、ぴよん〳〵と飛んで歩くそーである。

アラビヤ人の「ハードン」Hardhoh と呼ぶ「トカゲ」は、アフリカの北部に澤山ゐる一體回々教徒は、祈禱をする時に頭をぺこ〳〵と下げる、此「トカゲ」も頭をぺこ〳〵と下げる奇妙な癖があるので、回々教徒は、是を以て吾々の眞似をし、吾々を馬鹿にするのだなと邪推して、大に此の自然のコメヂアンを嫌つたといふとである

自分が自ら善いと信じてゐる事を眞似しられたとて、決して侮辱しられたとは思はない、寧ろ嬉しいよーに思ふ、反對に、自から惡い事だと思つてる事の眞似をされると、何となく馬鹿にされたよーな氣がする、回々教徒の祈禱は眞面目で無かつたと見える。

「ヤモリ」は大概夜の動物であるから目が大きい、體は割合に小さくて、大きいのでも一尺四寸を越へるものはない、性質が險惡で、蛾や昆虫、時には同じ「ヤモリ」の中でも、小さい、弱いものを取つ



「カラトカゲ」

て食ふ、甚しいのは、自分の脱ぎ棄てた「ヤモリ」の衣、及び、びら〳〵と振れてゐる其の尻穂をさへ、食ふことがある、喧嘩が好きで、仲間同士でも時々爭鬪をやるが人の家の中に居るものは直ぐ慣れて、時を定めて米などを呉れてやると、その時刻にはちやんと出て來て、少つとも怖いと云ふ風もなく、御馳走を食べると云ふとである、「ヤモリ」には聲を發すとの能るものがある、印度邊に居るGeckoguttatus G. monarchus など云ふ大きい「マモリ」は、トキー "tokee" 或はトク "tok" といふよーに聞える鋭い聲をだして啼く。

陰れてゐる「トカゲ」は、睡りと云ふとと、死といふとのシンボルである、又「トカゲ」は、よく庭の石の上などに日向ぼつこをしてゐる、日光が好きだといふ處から太陽の神「アポロン」に付けられてある。

サソリの自殺

「サソリ」は、歐洲では、南の方にのみ居て、躰は割に小さい、中央アフリカや南アメリカには澤山居て、一尺位の大きいのがある、書間は、石の下や、樹の皮の陰や、壁の崩れた穴などにかくれてゐて、夜出て來ては、昆虫、蜘蛛などを捕つて食ふ。

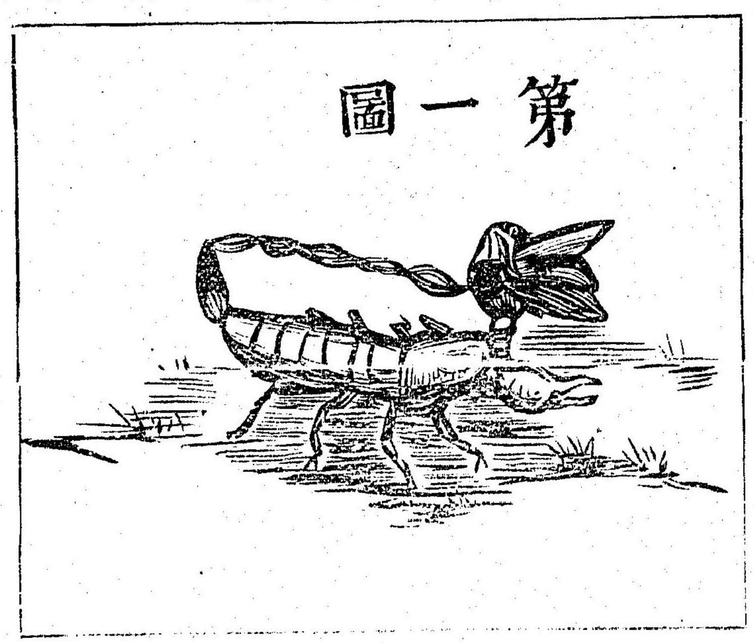
「サソリ」Scorpionの餌を捕るのは、尻にある針で刺し殺すので、刺すと同時に針からは毒が出て、それで敵は死んで了う第一圖は「サッリ」が「ハイ」を大きい鋏（第三圖A）で、捕へて、注意して、その頭と胸との間へ、毒針を刺し込もうとしてゐる處である、第二圖は同じ「サソリ」が、既に殺して了つた蠅を、小さな鋏（第三圖B）の間に挿み、大きな鋏を前に出して、新しい敵の攻擊及び防禦に備へてゐる處である餘程手廻のいゝやり方で、貪欲な虫と見える。

卵子は、雌の卵巣の中で受精して、又その中で發達する、産れる時はもう立派な子供になてゐて、阿母さんの「サソリ」は、その小供等を脊中に負ふて守をする。

「サソリ」は「クモ」と同じ種類であるが、糸を紡む器官がないので、「クモ」のよーな巣は造らない、然し、沙漠などにある「サソリ」には、砂の中に大きな穴を堀つて、巣にするものもある、此の時、砂を堀るには大きな鋏でもつてするが、その堀つた砂を後の方に掻き除けるには、第三番目の歩脚（第三圖C）を用ゐる、毒汁の多少は「サソリ」の齢と、時期とによつて相違がある、而してその毒を注入された後の結果如何は、無論、被害者の健康狀態、體格、精神等に關係する、之は猶廣い場合に適用し得る事であるが、氣の弱い者に、毒の利き方の甚いのは、全く泣き顏に蜂で、始めは只、夫れ程でもないのを心配するのみに止まつてゐよーが、終には、夫れが原因となつて、ある心理的狀態の變化から、生理的にも變化を生じ、杞憂に過ぎなかつたとが、幾分事實となつて現はれ來るは、あり得べきとである、「モーベルチユイス」Mauper tuisといふ人が、「イヌ」と「ニハトリ」に怒つた「サソリ」の針をさゝせたが、平氣であつた、之に反して「レヂ」Redi といふ人が、「ハト」にさゝせた處が

「ハト」には非常に毒が利いて、往々死ぬともあつたといふとである、鳩は優美の化身で、朝すが〳〵しい神の庭に、軟かい羽の頸を前後に動かして、折屈そーに歩を移してゐる處など、いかにも優しいよーでわるが、「レジ」の實驗によると、只形ばかりでなく、體の構造が、亦非常にデリケートだと見える、「ヂウセット」Jousset の話によると、「サソリ」の毒は直接に赤血球に作用を及ぼして、赤血球は忽ち健康狀態を失ひ互に合着して毛細管の中に塞がり、血液　運行を阻害して

第一圖

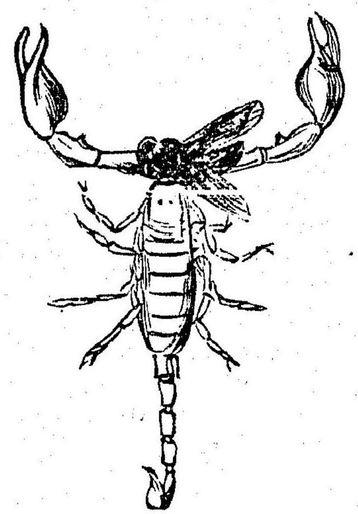


了う。

「クモ」は餘り遠目が利かないが、「サソリ」は一層近眼で、自分の鋏の尖端より先はたんと見えないといふことである。

昔から、「サソリ」は火攻めに會ふと自殺すると云ふ事は、己に譬へ話のよーになつてゐるが、學者からは是認されないで「ピッカード、ケンブリッヂ」Rev. O. Pickard Cambridge などは、隨分頑固なことを云つてゐる、

第二圖



「サソリ」が火で取り卷かれた時は、自分の針で自分を刺し、自殺を遂げるといふことはよくある話で、自分も非常に委しい話を開いたことがあるが、然し、夫は到底旅行談 "traveller's story" 以上のものではない。

こんなに、頭から却けて了うのは、餘りに無造作過ぎる、兎に角、「ビチー」Bidie といふ人が、マドラスで實見したといふ南方印度の、「クロサソリ」の話を書いて見よー。

ある朝、下女が、一匹の大きな「クロサソリ」を持つて來た、この「サソリ」は、餘り夜長く、そこらを彷徨して居たので、夜の明けたのに吃驚し、返るを忘れてまで〳〵してゐたものと見える、「サソリ」を靜かにさせて置く爲に、瀬戸物の虫函の中へ入れてやつた、自分は、午前の中に少し暇があつたので、虫がどんなになつて居るか見よーと思つて、函を暑い日の射す窓の所へ持つて來た、光と熱は、非常に夫れを刺擊したよーであつたから、自分は、どこかで「サソリ」は火で圍まれると、自殺をするといふことを讀んだのを思ひ出した、自分は、自分の可愛い虫に、そんな殘酷なことをするのを、一寸躊躇したが遂に意を決して、通常の植物用のレンズを持つて來て、「サソリ」の脊中に光線を集中した、すると、「サソリ」は

忽ち暴れ出し、シッ〳〵と妙な聲を發し乍ら、函の中を狂ひ廻つた、四五度光線をフォーカスして見た處が、矢張り前と同じ樣に、函の中を走り廻るのみであつたが、其の次にも、一度やつた時は、「サソリ」は、もう堪らなくなつたのか、咄嗟尾を上げて、あつと云ふ間に、その毒のある針を、自分の脊中へ深く刺し込んで了つた、刺すと間もなく、瓶口から水が出て來たが、哀れな「サソリ」は、その後半分も經たぬ中に、死んでゐた。

「ビゲー」は猶その終りに、

一、動物(無論人間以外の)だとて、自殺と云ふことを行ひ得る、

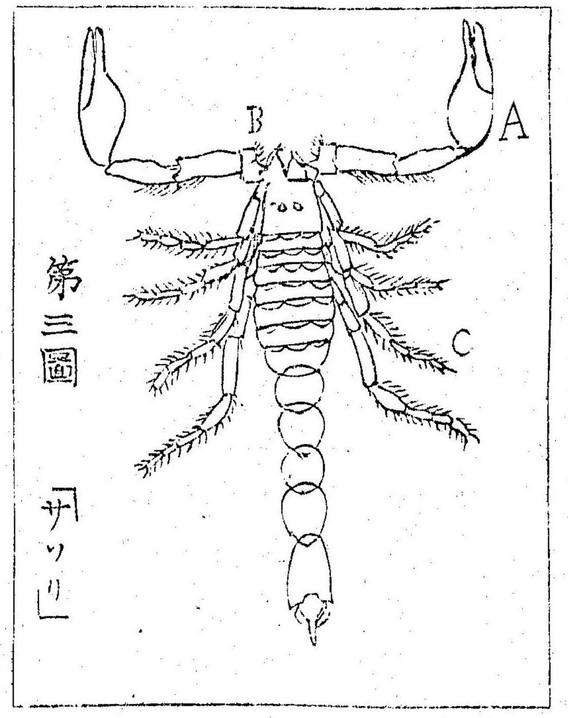
二、ある動物の毒は、又、彼等自身に取つても有害であり得る、

といふことを、自分は、此の零碎なノートに依つて示したい、

と結論してある。

も一つ、「アレン、トムソン」 Allen Thomson といふ人が、「ハッチンソン」 B.F. Hutchinsonの、「サソリ」自殺否定說に對して、その又反駁をする爲めに持ち出した、自分の友人の實見談といふのがある。

その實見者は、家族の者と一所にある夏の間、伊太利のスラの溫泉に滯在して居つたが、小さな、黑い「サソリ」が、家の中へ入つて來て、寢床の中や靴の中、其の外、着物、いろ〳〵の道具の中などに潛れてゐるので困つた、どーかして退治しなければならないと云ふので、われこれと考へてゐた處へ土地の者から「サソリ」は急に火に曝すと一人で死ぬといふことを聞いた、そこで、



第三圖　「サソリ」

その人達は、直ぐに「サソリ」を捕へて來て、倒に伏せたコップの中に入れ、不意に、蠟燭の火を近けて見た、すると「サソリ」は非常に激昂して、コップの中を目の暈るよーに驅け廻り出した（「サソリ」は平常は、餘り運動の敏捷のものではない）そんな風にして、一分間許りも暴れてゐたが、急に「サソリ」は靜になつたと見る間に、尾を上げて、曲つた針を頭の眞中に突き刺し、程なく身動きもせず本當に死んで了つた、此觀察は度々繰り返され、「サソリ」を退治するに、一番いゝ方法として用ひられた。

之が確かに病的の現象ではあるまい、若し之が事實とすれば、快樂苦痛の感情の、比較的のものであるといふ一つの例を、此の「サソリ」の自殺が與へる。

白蟻

「シロアリ」（Termite 或は White ant）と云つても、「アリ」と同じ種のものではない、唯、いくらか「アリ」に似てゐる處のあるので、斯う云ふ名が付いてゐるのである。

「シロアリ」は、「アリ」など、共に、社會的昆虫Social insect と云つて、單にその形造る社會組織の上では、人間よりは數等上の、完全な、殆んど理想的の、社會生活をなす動物である。

アフリカにある「シロアリ」は、一丈から殆ど二丈に達する大きな、圓錐形の塔を作る、塔を作る材料は、泥土、石、木片などで、之等のものは、其口から出すねばゝしした液で、丈夫に膠着けられる、塔の丈夫なとは非常なもので、よく水牛が、之を物見臺にして此上でもつて、敵の番などをするといふとである、まだ水牛處ではなく、大きな躰の象が上つても、潰れるよーなとはない。

此の塔は又、その中に樓む「シロアリ」の數が殖えるに從つて、だん〳〵と大きくなつて行く、塔の下には、巾一尺もあるトンネルが四方に走つてゐて、之が道になる此の外に、雨の降る時の要心に、排水用の穴が澤山に開いてゐる「ビユヒネル」

Büchner は

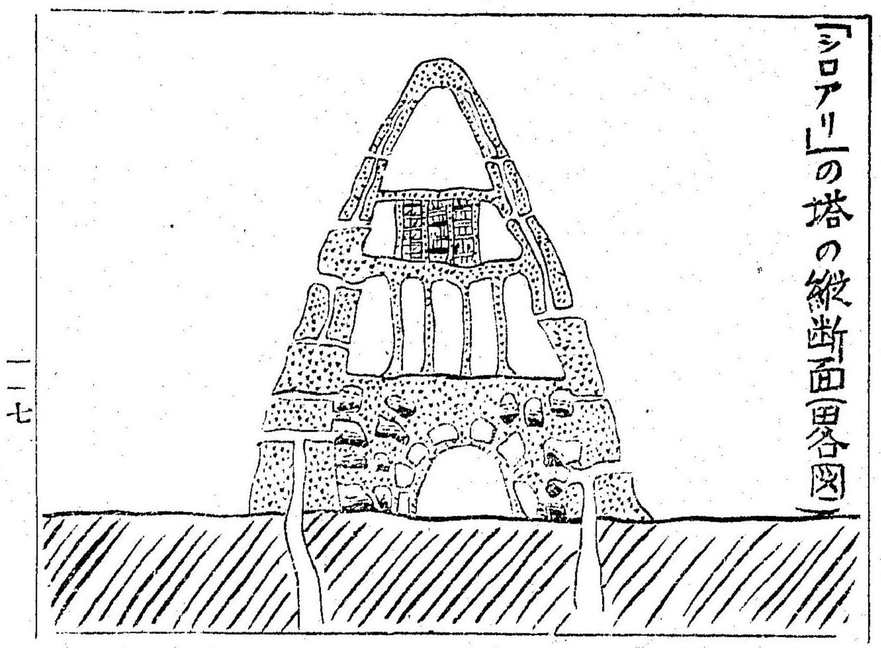
もし人間が、此の「シロアリ」の塔に比較して、劣らぬ程の規摸の三角塔を作るとすればその高さは、少なくとも三千尺以上なくてはならぬ、

と云つてゐる、大きな「クフのピラミッド」Pyramid of Khufu でさへ、やつと高さが四百八十一呎と四吋だと云ふから、迚も「シロアリ」の塔の比較になつたものではない。

猶、塔の内部の構造や、いろ〳〵の習性などに就て「ビユヒチル」の話がある。

塔の中には、無數の部屋、倉庫、路、廊下、橋、トンチル、坂、段々などがあつて、夫れからは皆一定の方式に從ひ、非常に巧みに設計されてある、中央には、凡ての外部からの危險よりは可成遠かつて、王と女王の居る圓い竈のよーな御殿がある、夫には小さな入口に出口とあつて、用をたす職蟻はやつと出入するとを得るが、躰の大きい女王には出入が出來ぬから、女王等は寧ろ其の中に幽閉されたのも同じことである、殊に卵子を産む時には、女王は非常に膨れて、大さも目方も、普通の職蟻よりは、二千倍にも、三千倍にもなるから到底出られたものではない、だから女王は、決してそこから外へは出す、遂には幽閉されたまゝ死んで了う。

御殿の廻りには、始めに小さいが、女王の大きくなると共に大きくなつて、遂には少なくとも、長さが一ヤード、高さが半ヤードにも達する卵子や幼虫を入れる室がある、其の次には、女王



「シロアリ」の塔の縱斷面（巴各図）

に仕へる職蟻の室、其の次には、近衛の役を務める兵蟻の特別室がある、之等の室の間にはヤニ、種子、果實、ゴムなどの一ぱい充ちた倉が澤山ある。

親を食ふ人

「バッタクス」Battas 或は「バッタクス」Battaks 人は、スマトラの北方にゐる人種で、自ら、自分等は此の島にゐる人間の中で一番古いものだと、信じて居る、而して、非常に頑固な、尚古主義を取つてゐる。

この「バッタクス」の間には、昔から食人Cannibalismoが行はれてゐたが、その食はれる人間は、

夜中に泥棒をしたもの、
爭鬪の際に生捕つたもの、
夫がその不平を鳴らすよーなよくない女、

などいふ類である。

以前、「バッタクス」人には、親が餘り年を取つて、もう働きが出來ないよーになると、それを殺して食ふといふ恐ろしい風習があつた、親もそれを承知して、當然のと思つてゐるのか、いよ〳〵其の時になると、少しも騷がず、落着いて、樹の枝を手で握つて、懸垂でもやる時のよーに、ぶらりとぶら下る、親がさうしてぶら下がつてゐる間に、小供や近所の者は、その枝の下へつらりと並んで、舞踏をし乍ら。

樹の實が熟せば、あの人も、
轉げて落ちねば、
ならぬよー、

といふ奇妙な歌を唄ふ、樹の枝の樣に枯れた腕は、程なく疲れ果てて堪へられぬ程になり、やがて、ばたりと地上に落ちると、皆その傍に驅け寄つて、痩せた體をずた〳〵に引裂いて喜んで其の肉を貪り食ふ。

若し女か、何か惡いことでもすると、それを殺して、先づ夫であつた男がその耳を食ふ、體の殘りの都分は、殺した者だの、手傳をしたものなどが分ける、その中でも心臟と足の裏とが一番値打のある處で、頭は其處の酋長が取り、殊に腦は、瓶の中に入れて大地に埋つて置く、夫から、猶妙な習慣のあることは、この肉を食ふ間は、決して水などを飲まず、只飲むのは、竹の筒に入れてある人間の血だといふとである。

「パッタクス」の中でも殊に野蠻な「バク、バク」Pacqs-Pacqs といふ人種は、親が老年になつて、その家に掛けてある梯子をも上れなくなると、先づ、親の肉を太らせて、それから殺して食ふ、ある宣教師が一人の酋長に、そんな事をするのは、非常に恐るべき罪惡だ、といふことを知らしめようとした處が、酋長は、

そんなら貴方々は、親が死んだら如何します？

と尋ねた、そこで宣教師は得意になつて、

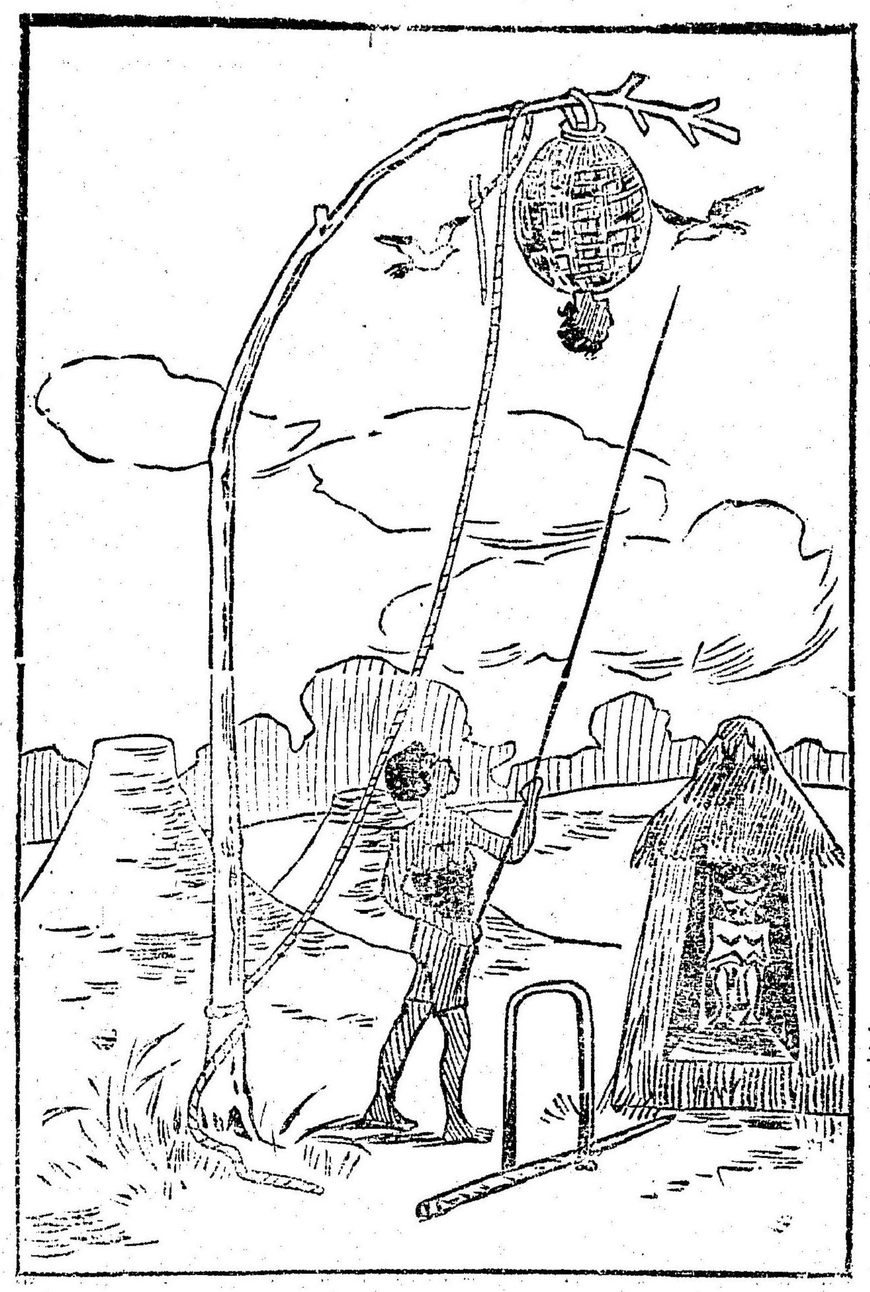
自分等は、死んだ者をば地下に埋める、然うすると、體はそこで腐れて、自然に無くなつて了う、

と、懇々説明した處が、酋長は圓い目を一層睜いて、

私等の體より大事なものが、又と世にありませうか？何にもなにじやありませんか？

そうです、私等は私等の親が可愛くてならぬから、私等の體を親の墓にして、親の身が私等の身になつて、親が私等の中に甦るようにするのです、貴方々は、親を地の中で腐らせて、虫の餌にするより、斯ふする方がいくら良いか知れないと思ひませんか？

と、いかにも理のある反問に、宣教師は答へる言葉もなかつたといふことである、酋長は正直に其の思つてゐる處を云つたのであろう、彼の言葉は、生理的に正しい言葉である、又極めて率直な、源始的な人間の感情を現はしたものである、こゝでは全く善惡の標準を異にしてゐるから、吾々と同じ道德法を以つて、彼等の行爲の批



親を食ふ人

判をするとは出來ない、彼等に於ては、老人になつた親を殺して食ふのも善であらう、小さな偶像の祀日に、無辜の人間を殺して犧牲にするのも善であろー、親を食ふといふのは、いかにも恐ろしい、氣味の惡いとではあるが、世が文明に進むにつれ、物事が形式的に流れて、譎詐奸獰、狐のよーな物のみが、跋扈するのを見ると彼等の赤裸々なる小供のよーな正直な心が、可愛ではないか。壯快ではないか。

茲にある繪は、アフリカのダホメー Dahomey の土人が、人間を倒に樹に吊して神の犧牲にする處である、右の方の小屋の中に入つてゐるのが、即ち、その犧牲を捧げられたる神の本體である。

かへる

南アメリカには、隨分蛙の種類が澤山あるが、その中のある者は、ずつと離れたオーストラリアにのみゐて、外の處には、世界中どこを尋ねても居ないといふのがあ

る、即ちある、樹にゐる蛙で、「ベロドリアデー」Peldryadae といふのは、此の二州にのみ限られた蛙である、「リトリア」といふ屬に、オーストラリア特有のものであるが、之と同じ者がたつた一種、南米のパラグエーに居る、又、ニユージランド特有の蛙も、其れに最も近い種類の者は南米に居る、其の上この二州は、蛙の分布に就て、消極的の類似を持つてゐる、即ち、「ラナ」Rana(「トノサマガヘル」「アカガヘル」などいふ蛙の屬)は、六十種以上もあつて、地球上の部分には、殆んど居らぬ所はないといふ程であるが、南米とオーストラリアには、兩方とも何にも居ない、さて、此の事實から、南アメリカとオーストラリアは、いつの頃か屹度、地續きであつたに違ひないといふ説が出て來た。

オセアニア州の諸島には、蛙は又、殆んど全たく居ない、只ニユージランドに一種(Liocpelma Hochistetteri といふもの)其他、フイジー迄の、太平洋諸島の間に一二種あるのみで、それ以外の島には何も居ない、現在之等の諸島にゐる動物は、皆

その最も近い大陸から來たのだといふ假定説によれば、こゝに蛙の少くないのは、蛙は卵子も親も、鹽水に會へば直き死ぬといふ事實から、容易に説明される。

蛙は、どこにも廣ろく分布してゐる動物であるから、四圍の狀態に對して適應する力 Anpassung の強いとが分る、然し、前にも云つたように、海を渡るといふとは能ない、又小供の時も大きくなつた後も、皮膚呼吸をする爲に濕氣の必要がある、だから、廣い砂漠などを横ぎつて旅行することも能ない、それ故、蛙は、樹にゐるのでも地上にゐるのでも、川や池や沼などから、餘り隔たつた處には居ない、蛙は自分の棲み慣れた處から二百ヤード或は三百ヤードも遠くへ連れて行つても、放せば直ぐに又元の處へ歸つて來るから、地方を知り分ける一定の觀念があるように見えるが、「ロマチス」は

之れは恐らく、元の棲家には濕氣が澤山あつて、蛙は、遠くからでも、其の濕氣のあるとを知るとが能るからであらう、

と云つてゐる、又「ワーデン」Warden といふ人の話によると、

ある、蛙の澤山居る池の水が涸れたら、その中にゐた蛙は、其處からは一番近いが、併し、八千メートルもある水のある處へと、一直線に移住をして行つた。

兩棲類と爬虫類は、殆とんど皆、冬眠 Hibernation(Hybernation とよく書くが、之はラテン語の冬といふ字 hiems から來たので、前の方が正しいとか云ふとである)をするが、蛙もその中の有名なもので、北方に居る者は、冬になると、池の底の、沼の中などに、澤山群をなして潜つて冬眠をする、然し、暖かい所に居る者は、その必要もないと見えて「ベル」教授 Professor Bell の面白い話がある

教授のある知人に、キングストンに住んでゐる者があつたが、其の人の家の勝手はテームス河に臨んで建られてあつた、それから、そこの下女には、一匹の仲好の蛙があつて、その蛙は、壁の下の方の穴の中に棲んでゐた、蛙は毎日夕方になると穴から出て來て、勝手の火の前で暖まり、三年間續いて、冬眠もせずに居つた、

といふとである。

墓が、岩の中に閉ぢ込められて、然も活きてゐた、甚だしいのは、石炭の中に活きた墓がゐたなどいふ、話は澤山にあるが、恐らくは皆、單に話丈けにすぎぬ、フエブユラスなものであらう。

反對に、熱帶地方にゐる者は、夏暑い時にはその體から濕氣の放散するのを防ぐ爲に、夏眠 Aestivation といふことをする。

「プフホ、オプステトリカンス」Bufo obstetricans は、産婆の墓といふ意で、この墓の雄は産婆(日本には産爺といふよゝな字がないよゝぢが、こゝでも男の産婆だから寧ろ産爺 accoucheur とも云ふべきであろう?)の役をする、即ち、卵子を産む時には、雄は後へ廻つて、雌の腹の中から、卵子の入つた、心太の細引のよゝな物を、引張り出してやる。

フランスやドイツ邊にゐる小さな蛙で、Alytes obstetricans といふのは、雌が卵子を産むと、雄はその卵子の細引を、股の廻りに卷きつけて、卵子のすつかり熟す迄靜かな處に隱れてゐる、卵子が熟すと出て來て、池の中などへ飛び込み「おたまぢやくし」の小供を、皆水の中へ泳ぎ出させる。

「ピータース」Peters といふ人の觀察によると、アフリカの西の方にゐる、「ポリペタ
ーテス」Polypedates といふ屬の、ある雨蛙の雌は、卵子を産んでから、例の心太
樣の物を、水の涸れた池の上の、樹の枝へ膠着ける、心太は程なくからく〳〵に乾い
て、卵子はしつかりと枝に附着する、やがて雨期に入つて、雨が降つて來ると、心
太は又軟かになり、遂々、雨に叩かれて、下に洗ひ落される、其の時には已う池に
も水が溜つて、卵子は、下に待ち受けてゐた雄の爲に、直く受精される。
成長した蛙は、多くは肺で呼吸するが、蛙には肋骨がないから、他の動物のよーに
胸を上下に交る〳〵動かして呼吸する譯には行かない、是非空氣を呑み込んで、肺
の中へ入れてやらなければならない、それには、口を閉ぢて、鼻で息をする必要が
ある、だから、蛙の口を無理に開けて、其の儘持つてゐると、程なく窒息して了う

東京では餘り聞くとは能きぬが、又、聞いたとて、せいこましい下宿屋の二階など
で聞いたのでは、それ程面白くも思はぬが、田舍で、夏の夜、月の涼しく差した椽
に端居して、裏の池、前の田などに、啼きすだいてゐる蛙を聞くのは、何とも思へ
ぬ靜かな、心地のいゝものである、杏の樹の下にたてた据風呂に汗を流して、清々
した浴衣に輕いステッキを引いて田甫に出れば、月の白い夜を、そこら一面に蛙の
聲である、そつと畦の近くに寄つて田の中を窺くと、歌の主はあらぬ狼籍者の近い
て來たのに驚いたのか、はたと聲を止めて、遠くの方へ水の中を逃げて行く、ちや
ぶ〳〵と音を立てゝ黑い物の動く毎に、月は細かく水に碎けて、そこに美しい、光
つた波の花が出來る。

「ダーウイン」の話に、

自分は度々、夕方「ヒレー」(Hylae 雨蛙の種類)の啼くのを聞く爲に、リオ、ヅ、ジヂャイロ(ブラジルの南の方にある港)の近くへ行つた、「ヒレー」は、水の傍の草の葉に止まつて、面白い、美い聲を出して啼いてゐた。

然し、「アマガヘル」の啼くのは、隨分噪しいものである、殊にスリナムSurinam(南アメリカにあるオランダギアナ)にゐる、ある雨蛙の聲は、非常にいやな聲で、それが澤山集つて一所に啼く時には、往々、パラマリポ Paramaribo(オランダギアナの)芝居のオーケストラを、啼き潰して了つたといふとである。

蛙も飼へばよく馴れると見えて、「ロマチス」の處へ報知をしたといふ人の面白い話がある、

私は、時々、池の廻りの棚の戸を開いて置いて、こつちで「トンミー」'Tommy'(之は、私が蛙に付けた名前です)と呼ぶと、蛙は直ぐに、叢の中から出て來て、水の中へ飛び込んで、私の方へと泳いで來ました、時には、私の手の上まで上つて來るともありました、私が「トンミー」と呼ぶ時には、どんな時でも大概出て來ました、餌は只、私等が朝飯を食べた後に一度呉れるとに定めてあるから、蛙は餌を貰ひ度いなど云ふ心からでなく、全く名を呼ばれたのみで出て來ること、思ひます。

誰かこんな面白い例を、實見した人は無いかしら?

スコットランドの博物學者「エドワード」の觀察によると、蛙の感覺力の、中々鋭敏であるとが分る、

(あるい、月の夜、蛙が澤山、噪ましい聲で啼いてゐたが)

諸人の聲が、殆んどその高調に達したと思ふ時に、不意に歌の音が絶えた、自分は驚いて、どうして此の奏樂が、こんなに急に途絶えたかといふことを疑つた、併し、そこらを見廻はした處が、樂場の近くの低い土手の上に、一羽の鳶色の梟が、羽音も立てず靜かに舞ひ下りて來た。

蛙は、古から、天氣豫報者Weather prophetとして知られて居るが、近頃でも、ドイツの或る地方では、「アマガヘル」Tree-frog (Hyla aborea)をバロメーターの代りに使つてゐるといふことである、先づ脊の高い壜に、「アマガヘル」を二三匹入れて、中には、小さな梯子を掛けておく、すると天氣の好い時には、蛙は梯子の上の方に登つてゐるが、低氣壓が近いて雨が降りそうになると、壜の底の方へ下りて行く。

波浴

「カナーク」(Kanak)或はCanaque之はハワイ語のKanakaから來たので、國の人、或は土人等の意味であるそうである)は、ニューカレドニア及び、其の附近の諸島に住んでゐる人種の名である。

この「カナーク」人は、波の上でする運動が非常に巧みで、その子供は、まだ歩けない中に、已に泳ぐことを知つて居るといふことである、大人は、皆、波浴(Surf-bath或は bain de ressac)といふ奇妙な遊戯をする、夫れに付いて、ホノルに居つた頃、波浴をやつて見たといふ、「ベリシエー」といふ人の話がある、

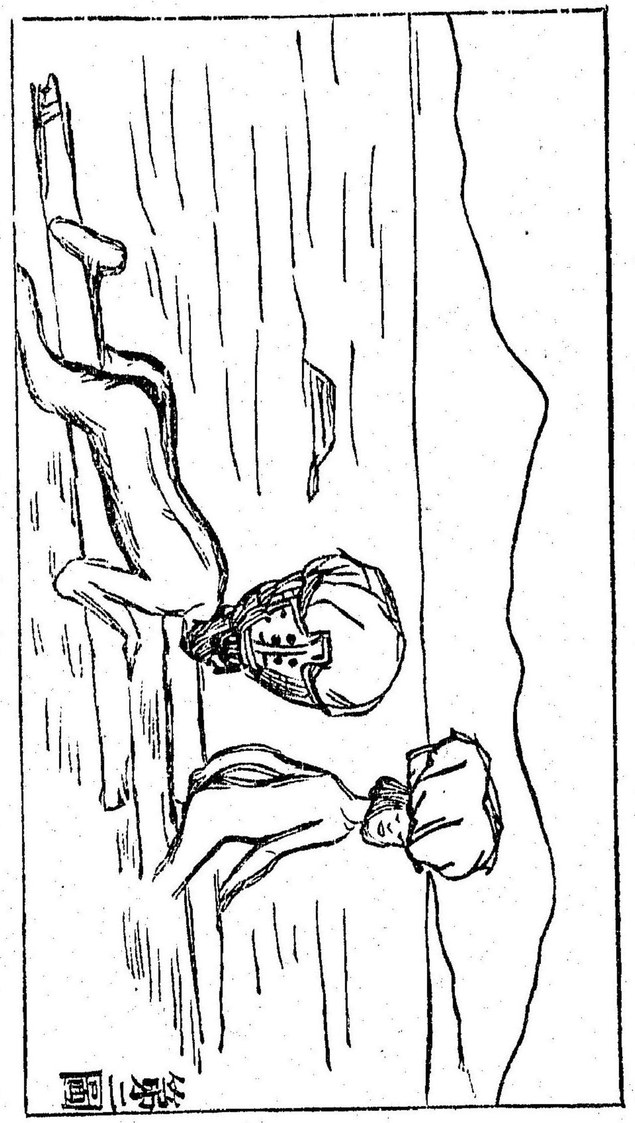
泳ぐ者は、てんでに、ハワイ語でpapa he naru (波の上を辷る板とでも云ふ意味らしい)といふ板(第一圖)を持つてゐる、板の長さは、一メートル半か二メートル半、巾は、四デシメートルか半メートル位で、恰度、洗濯屋の使ふ板のようなものである、板の面は、時には平のこともあるが、多くは、裏も表も少し脹れて凸面をなしている、板は「コア」Koaといふ輕い木で作り、美麗に磨いて、黑く塗つてある、彼等は非常に之を大事にして、使つた後は、直ぐ日光に曝して、すつかり乾かし、「コ、ア」の油を塗つて、それを叮嚀に布の袋の中へ入れて、ちやんと家の中へしまつて置く。

ハワイ人は、時には、普通の、平らな海岸でも波浴をやるが、殊に、岩が多く、波が甚く碎けるよーな處を撰ぶ、海が荒れて、波が高ければ高い程、波浴は一層

第四

面白いのである、ホノルゝの附近で、ヂャマン岬の近くの、ワイキゝ、Waikikiといふ處で、よく波浴をやる、天氣の都合のいゝ時には、往々、波に板を押して一哩以上も沖に出るとがある、板は、腕の下に抱へてゐるか、或は前の方に出して先達をさせる、彼等は決して波を乘り越へよーとはしない、大きな波の來た時には、靜かにその近づくを待つて居て、やがて、くるりと波の頭の下を潛つて彼方へ出る、……

波が海岸に近づく時は、上の方の水の速力が、だん〳〵下の方の水の速力より大きくなり、終には碎けて濱に打ち上げる、この波に板を乘り入れる時は、板は非常に速かに波と共に運ばれて、波の全く碎けると共に無事に砂の上へ打ち上げられる、夏、東海道線に乘つて、薩陀の海岸を通ると、恰度、「カナーク」人の波浴のよーな事を、小供のやつてゐるのを見られる、眞黑な、丈夫そーな小供が澤山集まつて、レールの直き下に碎ける眞白な波の中に、魚のよーに遊んでゐるのを見るは、車窓の暑さも忘るゝばかり、心地のいゝものである、自分の方の海岸は、斷巖絶壁、直ちに水に迫つてゐるので、暴風の時の外、所謂サーフなるものが著しくない、とて



も、波浴をやり得る程の大きなサーフは出來ない、だから、自分の鄕里の方の子供は波浴などいふことは全く知らない、從つて、泳ぐのに板などは用ひず、板を用ひるのは、女の小供や、うけんぼー（溺れること）をする恐のある初心の者許りである。

第一圖は、「カナーク」人が、波浴をやつてゐる處である。アフリカの「ヌビヤ」人は泳ぐことは能ないが、河を渡るのが非常に上手である、渡るには、先づ木の丸太を河に浮かべ、着物を脱いで丸太の上に馬乘りし、着物などを皆頭の上にのせて、躰の平衡を保ち乍ら、脚を櫓にして漕いで行く、「ヌビヤ」人では、殊に女の方がこの河渡りに巧みだといふことである。

第二圖は、「ヌビヤ」人の女が、着物を頭に乘せて、河を渡つてゐる圖である。

1/5/40

變動物學
定價金三十錢

明治三十九年九月一日印刷
明治三十九年九月廿日發行

著作者　秋美生
發行者　日本橋區馬喰町三丁目十四番地　瀧川民治郎
印刷者　京橋區日吉町四番地　高城寛雄
印刷所　京橋區日吉町四番地　民友社印刷部

不許複製

發行所　東京市日本橋區馬喰町三丁目　今古堂書店
關西賣捌　大阪東區渡辺町　杉本書店

家庭小說

新夫婦

柳川春葉著

渡部審也畫

齋藤松洲畫

近刊豫告！

家庭小說に於ける春葉先生の名は世既に定評あり て今更ら喞々するの要を見ず。本篇は著者が得意の筆力を得意の方面に發揮せられたるものにして現今活社會に於ける家庭の情態より、夫妻の關係、交際の有樣に至るまで、其描寫の巧なる、蓋し近來の一大傑作なり。理想の家庭を造らんとする者は讀め、家庭に趣味を求めんとする者は讀め、共に唯一の淸凉劑たり。敢て紳士淑女の閲覽を俟つ

今古堂書店發行

黒法師著　鏑木清方畫

家庭小說

想夫憐

定價　金四拾五錢
郵税　金八錢

本書は讀賣新聞紙上に連載して近時の好讀物として歡迎せられ新派俳優の劇壇に登せて滿都の好劇家を醉しめたる小說なり世に忌み嫌はるゝ階級に生れ胸に萬斛の秘密を包める美人が慘忍冷酷なる軍人に迫害せられ幾多の辛酸を嘗むる情態より戀に泣く淑女美を妬む寡婦皆な著者が靈活なる筆によりて紙面に躍るが如し

楓村居士著

事實小說

橘英男

定價　金四拾五錢
郵税　金六錢

愛國の赤心を抱きて、而も溫厚篤實なる一武官橘英男と云へる者、參謀總長より秘密の命を受け、滿洲に至り、馬賊生活を送る事二年、其間秘計詭策、時局の進行を促がさんがため、龍潭に臨み、虎穴を探りし事蹟を、小說的に記述したる實事譚にして、世に有り觸れたる架空の小說と異なり、篇中の人物は、一讀の下此は誰彼は某々、當世知名の人たることを推測するに難からず、

本篇は當時文壇の名士某が楓村居士の匿名を以て讀賣新聞に連載し、好評を博したるものにて、其文章の輕妙、珠の盤に走るが如く、忽ちにして狂瀾怒濤澎湃天に滔り、忽ちにして花紅柳綠、春風駘蕩、忽ちにして猛虎深山に嘯き、忽ちにして嬌鶯花間に囀り、局面の變化、端倪すべからず、殊に事蹟の壯烈無比須らく一讀を要すべく、又家庭の讀物として最も恰好なるべし。

廣津柳浪作　鏑木清方畫

小說

二筋道

定價　金六拾錢
郵税　金八錢

清健なる筆趣、艶麗なる思想を以て文壇に飛雄しつゝある柳浪子が新なる感興に觸れて猛然筆を起されたる長篇なる大作は即ち是れ、先に大阪時事新報に掲載せられて讀者が歡呼の聲に迎られたるを以ても如何に本篇が興味深き小說なるを知るに難からじ弊堂幸に此の好著を發行するの榮を得たり今や高尙優美なる美裝を凝らして讀者に謁ゆ請ふ愛讀を給へ

德田秋聲著　鏑木清方畫

小說

結婚難

定價　金六拾錢
郵税　金八錢

結婚難なる哉結婚難なる哉結婚は男女終生の運命を決するの時にして涙の生涯來るべきか喜びの生涯を迎ふるべきか選擇の良否は青春なる男女の生涯を定む秋聲子這般の消息を描寫し盡して遺憾なし又好個の家庭小說なり

文學士橋本青雨著●鏑木清方●平福百穂畫

小說 愛の犧牲

定價金六拾錢
郵稅金八錢

戀は神聖なり。何の故に神聖なるや、之を口にし之を筆に上すは一の流行語の如しと雖も、下劣なる情慾に驅れて、肉慾の滿足み得んと欲する者多くして、純潔無垢の愛情を捧げ、相愛して畢生渝るなき者は曉天の星光のみ。本篇の主人公たる雪江、春美の如き、互に滿腔の愛情を捧げて結婚したる夫妻間に在ても、終生其愛を抱持する事能はず寬の誘惑は之を破らんとして春の如き樂しみは、悼ましき悲しみと變り果つる、戀の徑路は、青雨子が艶麗なる筆に依て、縱横に描寫し盡されたり。愛の犧牲とも何物。之を繙けば陶然として春の夜に眠るが如く趣味津々として盡ざる者即ち是れ

江見水蔭著●鏑木清方●平福百穂畫

小說 雲かくれ

定價金六拾錢
郵稅金八錢

怒濤庵主人の健筆精練にして奇警なる世既に定評あり此一篇は主人が特に意を用ひたるの好著にして談は雪子鋭之助の情死を叙したるもの伊香保山中に於ける二人が戀の煩悶は讀者をして深き同情を蒐むべく義理と情緒の柵に死を以て現在の苦痛を減せんとするに至るまでの戀の徑路には波瀾百出崎嶇羊腸近時の文壇稀に見るの雄篇なり幸に愛讀を賜へ

今古堂新刊書目

廣津柳浪作　和田英作畫

小說 横戀慕

定價金六拾五錢
郵稅金八錢

紳士淑女が家庭の好讀物として茲に『横戀慕』を薦む『横戀慕』の一篇は寫實小說を以て當時其右に出づる者なき柳浪子が婉曲自由なる筆を以て寫し出したる人情の微、戀慕の情、讀者をして目前活劇を見るの思あらしむ『横戀慕』は人世の意義に於て、家庭の趣味に於て、倫理の好標本として讀者に謁ゆるの好文字なり

江見水蔭作　鏑木清方畫

小說 女船長

定價金五拾錢
郵稅金八錢

題目既に奇なり軟弱なる婦人の身を以て或る動機に促されて强健鬼の如き數多の水夫を使役して萬里の波濤を濶歩す奇想天外より落つるとは實に本篇に冠する好文字なり加ふるに怒濤庵主人の筆致を以てするに於てをや日本は海國なり日本の婦人は海國の婦人なり豈に繙讀の價値無しとせんや

小說 母の紀念 前編

徳田秋聲著 渡部審也畫

定價 金六十五錢
郵税 金八錢

秋聲子の作常に構想の妙を競はず淡々として筆を行る。其の始めて構想の妙を以て優れるものは『母の紀念』の一篇なり。惡魔の如き繼母の爲に財を覬はれ家を逐はれ戀を失ひて尚且つ其清操を保つ葉森縫子が品位の如何に高きかを看よ。

現代思想界之根本的批評 人生の歸趣

前農科大學教授 在大學院法學士 河上肇著

定價 金三十錢
郵税 金四錢

思想界の革命兒を以て自任した無我愛同朋は流星の如く現はれて流星の如く消ゆ、理想鄕の實現を以て自負した無我愛の眞理は再び聽くことが出來なくなりました。纔に形見として殘れるものは卽ち本書です。世の悶ある人、悲ある人、憂ある人、速に來つて本書に就き、絶對無我と絶對大我と、佛と耶と儒と、宗教と科學とを遣憾なく調和したる此の福音をお讀みなさい

今古堂新刊書目

小間使日記

定價 金貳拾八錢
郵税 金四錢

某地方に於て財産と門閥とを兼有したる家に生れ、出京して女子の高等教育を受けしが修業半途にして、不時の禍に遇ひ家道沒落したるため、學費供給の途杜塞し、心ならずも小間使となりて、幾多縉紳貴族巨商豪家の邸に住み込みたる薄命の一處女が、徒然の餘り其仕(居りし諸家の內幕、卽ち家庭の模樣より出入諸人の情態を最と精細に寫し置きたるもの卽ち此日記なり、元より筐底に秘藏して何人の目にも觸れざりしものなりしが、先頃偶然にも讀賣社員某の手に入り其一部分だけ同紙上に揭げられ非常の大喝采を博したるを今回弊舖にて讓受け更に趣味多き他の幾部分を增補して出版し口繪には筆者女史が愛せし風景を揭げ製本の體裁も頗る高尙にして美麗なり當時朝野に時めける紳士豪商の家庭を知らんと欲せば本書の右に出る者なし

廣津柳浪作

脚本 目黑巷談

定價 金貳拾五錢
郵税 金四錢

著者が脚本の處女作本鄕座六月狂言として高田河合一派の俳優に由りて演ぜられしものなり段々の周悉章句の綯闘著者獨得の流暢なる艶筆になれるは玆に喋々を要せず若旦那某が許嫁の娘を振り病母を棄てゝ藝者上りの茶屋のお神に現を拔かし惡黨に家屋敷まで奪はれたるを俠客某が一手に買て惡黨を斬り若旦那が覺醒し來れば戀したるお神は片思にして許嫁の娘が切なる情を知り自ら恥ぢて俱に情死を遂ぐるに終る意趣淺薄なる遊冶郎の情態を寫し出したものにて興味津々として盡さず讀者をして卷を掩ふ能はざらしむる近來の傑作なり

今古堂新刊書目

讀賣新聞所載

文科大學 學生々活

定價 金貳拾五錢
郵税 金四錢

學生々活とは云はずと知れて居る通り大學々生の日常生活の有様を寫し出した者で、大學々生YXなる匿名の著者が嘗て讀賣新聞に掲載せられて非常に喝采を博せし事實譚否實驗談である、地方の中學生が中學を卒業して上京し初めて大學の角帽を頂いて意氣揚々たる時代より筆を起し都の風俗は種々變化を與へ慷慨悲憤の志士となり放蕩怠惰の遊冶郎となり神經過敏なる哲學者となる千差萬別の有様に説き及ぼし加之に現今の諸教授の品性を月旦し縱横自在に現下の帝國大學を解剖したる者である一讀三歎とは洵に本書などを指した適切の評語であらうと思ふ

讀賣新聞所載

話の聞書

定價 金參拾五錢
税税金六錢

話の聞書は讀賣新聞記者月の輪先生が現今有名なる諸大家を訪問して各其專門の談話を聞いて筆記せられた速記錄である故に是を繙けば天下の學者を一堂に集めて其高談珍説を聞いて居ると同一で政治、法律、美術、文藝、衛生、數理、宗教、哲學を始め失策談あり、成功談あり艶福談あり實に愉快極まる珍書である

岡野知十氏閲　大島寳水氏編

新俳句類選

（最新發行）

定價廿五錢
郵税四錢

▲戸川殘花氏序。木村光太郎氏筆水彩畫挿入▼

明治卅四年より同卅九年に至る（即ち本年本月迄）六年間の我讀賣新聞所載の俳句中より更に又編者が幾年月を費ししかも愼重の態度を以て選びたる秀句二千餘章と岡野知十氏の『如何にして俳句を作るべき乎』と云へる有益なる長論文とを併せ載せたるもの、俳諧に於ける初心者は云ふも更なり、苟も現今の新俳壇を知らんと欲する者は是非此一本を座右に備へざるべからず

發行所　東京銀座一丁目　讀賣新聞社

農學士 有働良夫氏校閲 愛知縣農會 梅原寅之助氏著

實用 農家出納簿

定價 一冊金八錢 郵税二錢

特別減價

各郡村農會學校等より取まとめて注文の場合には左の通り割引の規定があります

百部以上 一割引
五百部以上 二割引

何故此の出納簿の特徴は本書は實費にて發賣するか

△極めて實用的に編纂しある事
△洋紙でなく、純美濃紙を使用したる事
△一々記載例を示したる事
△各農家必ず一本を備へざる可からざるものなれば奬勵の爲實費にて發賣せる事

農家が帳簿を備へて財産及收支を明らかにする事は經濟發達の根底なるのみならず之れを保存すれば、其家歴代の重寶ともなります

發行所 讀賣新聞社

島田三郎氏序 町田藍川氏著

風雲兒女

（最新發行）

四六版半載 二百五十頁
定價金廿五錢 郵税四錢

吐虹錄は東洋古來の道德及び風俗に就き著者の見解を述べて弊害を拔摘し**斬新奇警**の文字に富み然かも論旨は**穩健中正**を失はず嘗て其一部を讀賣新聞紙上に掲載せる時慶應義塾學報其他に於て大に稱讃せられたるものなり**髯絲禪語**

焦天苦地の二篇は名士の逸話、詩文談等を最も簡潔にして輕妙なる短文に寫したるもの數十條を收錄し**茶前酒後**は公の字の變遷、漢字の讀方、佛敎の衰頽、丁銀の主人、婦人と衣服、上野の動物園、蛇と田螺の喧嘩、金蛇の見世物、紳士學等極めて趣味ある話を彙め言文一致の無邪氣なる文字

里子の親は人情の機微を穿ちたる短篇の小說なるに詩あり歌あり狂詩あり著者が一枝の筆を以て社會道德を批するや眞面目なる論客となり詩文を談ずるや柳塘居士の文領を發揮し奇事逸聞を人に傳ふる時は讀賣新聞紙上一時世に知られし例の茶話子、小說を作れば橘英男を以て人の知る楓村居士、滑稽談諧の文字は田狸翁、其他藍川、破魔禪、卯木子、長劍子、笑門生等の名を以て此處に現はれ彼處に隱れたる怪物文士の本體を知らんとするには必ず本書を讀まざるべからず且つ書中の趣味は津々として盡くるを知らず島田三郎氏も序して能く人をして三伏の炎熱を忘れしむべし

今莊子は諷世罵俗の滑稽なる寓言は一讀人の頤を解くべし加ふ

一服の淸涼散たる如く文章の妙

發行所 東京銀座一丁目 讀賣新聞社

幸田露伴、戸川殘花、岡田三面三先生評論　（最新刊行）

朴念仁改朴山人選

第二輯　へナブリ

△ポンチ繪十餘枚入
△紙數約二百五十頁
△定價二十三錢
△郵税四錢

第二輯は第一輯より紙數も書數共に略ぼ一倍し歌數は四倍し其もの前輯より進歩せるとは幾倍なるや知らず前輯を讀みし諸君は必ず本輯を讀むべく前輯を讀まざる諸君は更に早く本輯を讀まざるべからず本輯には我黨の同人たる天下幾百の才人の詠草たる『同人抄』の外『亡友抄』あり朴山人の詠草『へなぶり抄』あり卷末へなぶり小論と卷首三先生の評論とはへなぶりみならず廣く文藝の士の一讀を要求せざるべからず

發行所　東京銀座一丁目　**讀賣新聞社**

97
377

97
387

057656-000-7

97-387

変動物学

秋美生／著

M39
CAR-0259